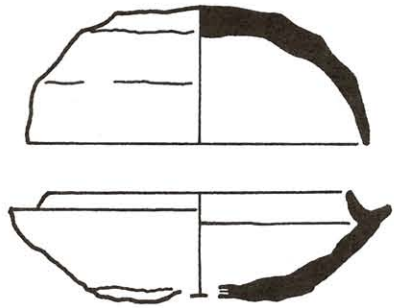
陶器南遺跡発掘調査概要・Ⅷ



2001

大阪府教育委員会

はしがき

陶器南遺跡は、堺市の東南部、泉北丘陵の北端に広がる遺跡です。遺跡の周辺は、都市化が進んだ府内の光景に反して、のどかな水田が起伏に富んだ地形に沿って営まれています。この地は「陶器」という地名が語るように、古くは古墳時代から奈良・平安時代にかけての一大窯業生産地として栄えてきました。遺跡の南に鎮座する陶荒田神社は、その信仰を今に伝えています。

本府教育委員会では府営ほ場整備事業に先だって、平成５年度より陶器南遺跡の調査を継続して実施しています。今回の調査は遺跡内でもっとも南の高所に位置します。そして、これまで発見されていなかった飛鳥時代の集落の一端を確認しました。この発見によって、陶邑で窯業生産がはじまって以来、少しずつ場所を変えながら奈良時代まで、須恵器の集荷・搬送拠点となっていた遺跡の実態が明確になりました。

他に、中世の大型建物と瓦器・陶磁器などの遺物が認められました。これらの遺構・遺物の存在から窯業生産が終焉したあと、遺跡をめぐる土地開発の実態がより明らかになりました。

末筆ながら、調査に際してご協力頂きました関係各位・諸機関に感謝の意を表するとともに、今後とも文化財保護行政に変わらぬご理解、ご協力をお願いする次第であります。

平成13年３月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　小　林　　栄

例　　言

1．本書は、府営ほ場整備事業「陶器北地区」予定地内で実施された陶器南遺跡発掘調査の概要報告書である。調査は、大阪府環境農林水産部から依頼を受け、大阪府教育委員会文化財保護課が実施した。

2．現地調査は、文化財保護課調査第２グループ技師、西川寿勝を担当として、平成12年６月に開始し、平成13年１月に終了した。遺物整理は、現地調査と並行して行い、平成13年３月末に事業を終了した。

3．本調査の航空写真測量は、株式会社パスコに委託して実施した。なお、撮影フィルムは同社において保管している。本文・挿図に用いた標高は、東京湾標準潮位（T．P．値）を示す。また、座標値は国土座標第Ⅳ系によるもので、方位は座標北を指す。

4．本書の執筆・編集は、西川が行った。本書に掲載した遺構写真は西川が、遺物写真は有限会社阿南写真工房に委託して撮影したものである。

5．発掘調査及び遺物整理・調査概要作成に要した経費は、農林水産省の補助を受けた大阪府環境農林水産部と文部科学省の補助を受けた大阪府教育委員会が負担した。

目　　次

はしがき　例言・目次

第１章　調査計画　１．調査位置調査方法 …… 1

２．陶邑以前の陶器南遺跡 …… 5

第２章　発掘調査　１．基本層序 …… 9

２．飛鳥時代 …… 9

３．発見遺物 …… 13

４．中世 …… 13

５．発見遺物 …… 17

第３章　老ノ池地区の調査　１．調査位置と遺構 …… 19

２．発見遺物 …… 19

第４章　まとめ　１．須恵器生産にかかわる陶器南の集落 …… 22

２．中世の陶器南の集落 …… 23

付載　明治四十二年発見の須恵器群について …… 24

発見遺物対照表 …… 26

抄録 …… 34

第１章　発掘計画

１．調査位置・調査方法

本遺跡は堺市陶器北に所在する。これまで、遺跡内では継続して実施されているほ場整備事業に伴って、広範囲に発掘調査がなされてきた。調査面積を累計すると約28000㎡に及ぶ。今回調査は遺跡内でもっとも南の高所に位置する3077㎡と、その東の陶器川による開析谷斜面186㎡について実施した（図１・２）。

大阪府教育委員会・大阪府文化財調査研究センターの発掘調査は調査区の位置を共通して表現できるよう、大阪府発行１／10000地形図を基準として４段階の区分を実施している（図３）。第Ⅰ区画は南西隅を基準として縦軸をＡ～Ｏ、横軸を０～８に区画する。陶器南遺跡はＥ５区内にある。第Ⅱ区画は第Ⅰ区画の南西隅を基準として16等分したもので縦1500m、横2000mの範囲である。陶器南遺跡は７区内にある。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を100m方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸を１～20、横軸をＡ～Ｏに区分したものである。今回調査地は12Ｂ・12Ｃ・13Ｆ・13Ｇ・14Ｆ・14Ｇ区内にある。第Ⅳ区画は第Ⅲ区画を10m方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸をa～j、横軸を１～10に区分したものである。例えば、今回調査区の一つはＥ５－７－14Ｆ－１jなどと表記する。

これまでの調査では表土（水田耕作土）と遺物包含層（水田床土）に覆われた地山上に遺構が切り込まれた形で発見されている。よって、本調査は表土を機械掘削で除去し、遺物包含層を人力掘削して遺構の検出に努めることとした。ただし、部分的に表土下に整地土層が確認される場合があり、この部分については遺物の有無を確かめながら機械掘削する予定とした。

ところが、表土を機械掘削した段階で、調査区の中央は大規模な削平が行われ、遺構・遺物が残されていないことが判明した（図８）。調査区東辺縁の斜面地には削平された土が整地土として二次堆積していたものの遺物はあまり確認出来なかった。したがって、遺構・遺物が良好に残されたところは調査区の北端と南端に限られる。この部分においても遺物包含層はあまり形成されておらず、発見遺物量は10箱に満たなかった。

検出された遺構は航空測量によって１／20で迅速に図化を行った。これまでの調査標定点と合わせ、３級基準点を二か所設置し、そこから調査区周縁に４級基準点を設けて地区割をすることとした。遺構・遺物が多数検出された場合は基準点から遺物とりあげグリッドを細かく設定する予定だったが、先に記したとおり遺構の密度が低く、遺物も遊離・散在していたので今回は設定しなかった。調査区は地形に沿って小地区（１～９区）を設定、遺物は遺構ごとにとりあげることとした（２章に詳述）。さらに、１～９区の北東500mの部分について、遺構・遺物の実態を確認するトレンチ調査を実施した（１、２a・b、３a・b区）。トレンチ調査は陶器川によって形成された開析谷の南斜面で老ノ池の西に位置する（３章に詳述）。

図1　周辺遺跡分布図（1／20000）

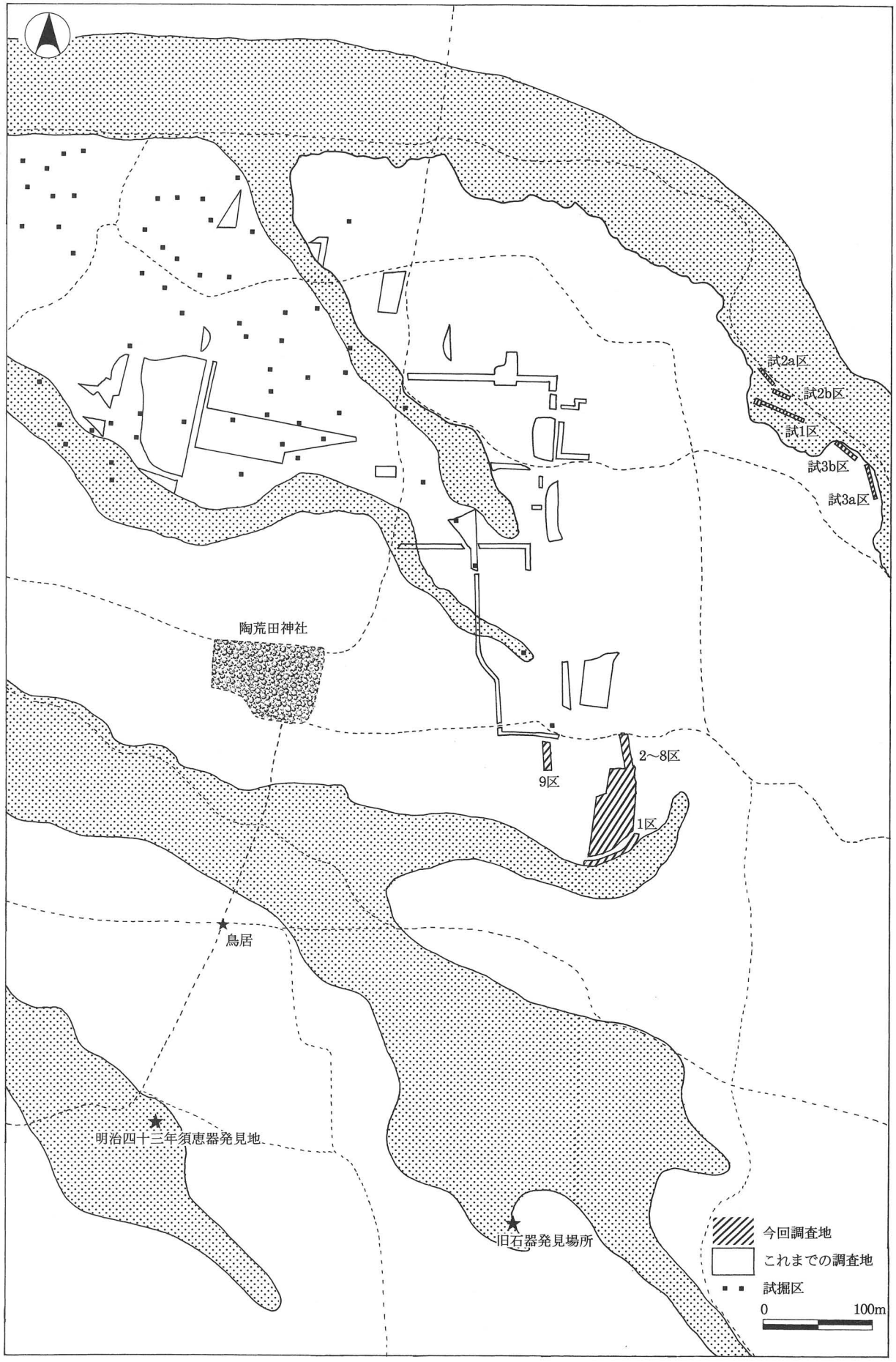
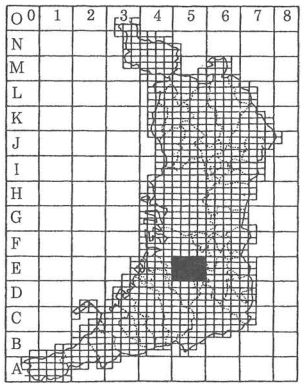
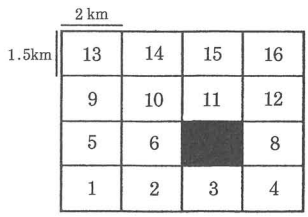
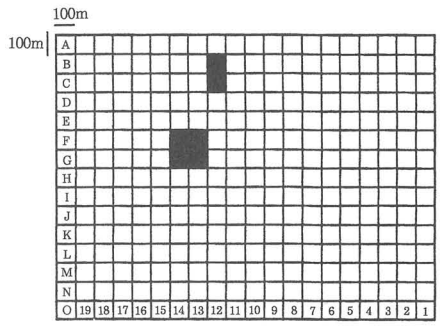
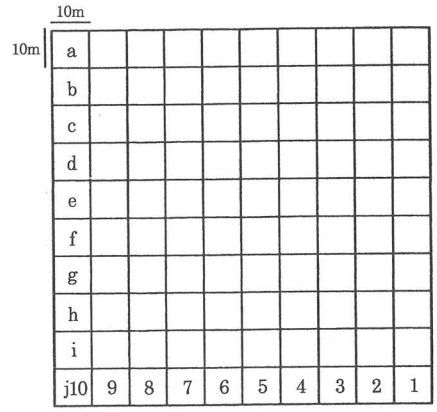


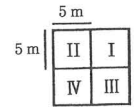
図２　これまでの調査地と今回調査地（１／5000）


0 1 2 3 4 5 6 7 8
O
N
M
L
K
J
I
H
G
F
E
D
C
B
A


2 km
1.5km
13 14 15 16
9 10 11 12
5 6 8
1 2 3 4


100m
100m
A B C D E F G H I J K L M N O
19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1


10m
10m
a b c d e f g h i
j10 9 8 7 6 5 4 3 2 1


5 m
5 m
II I
IV III

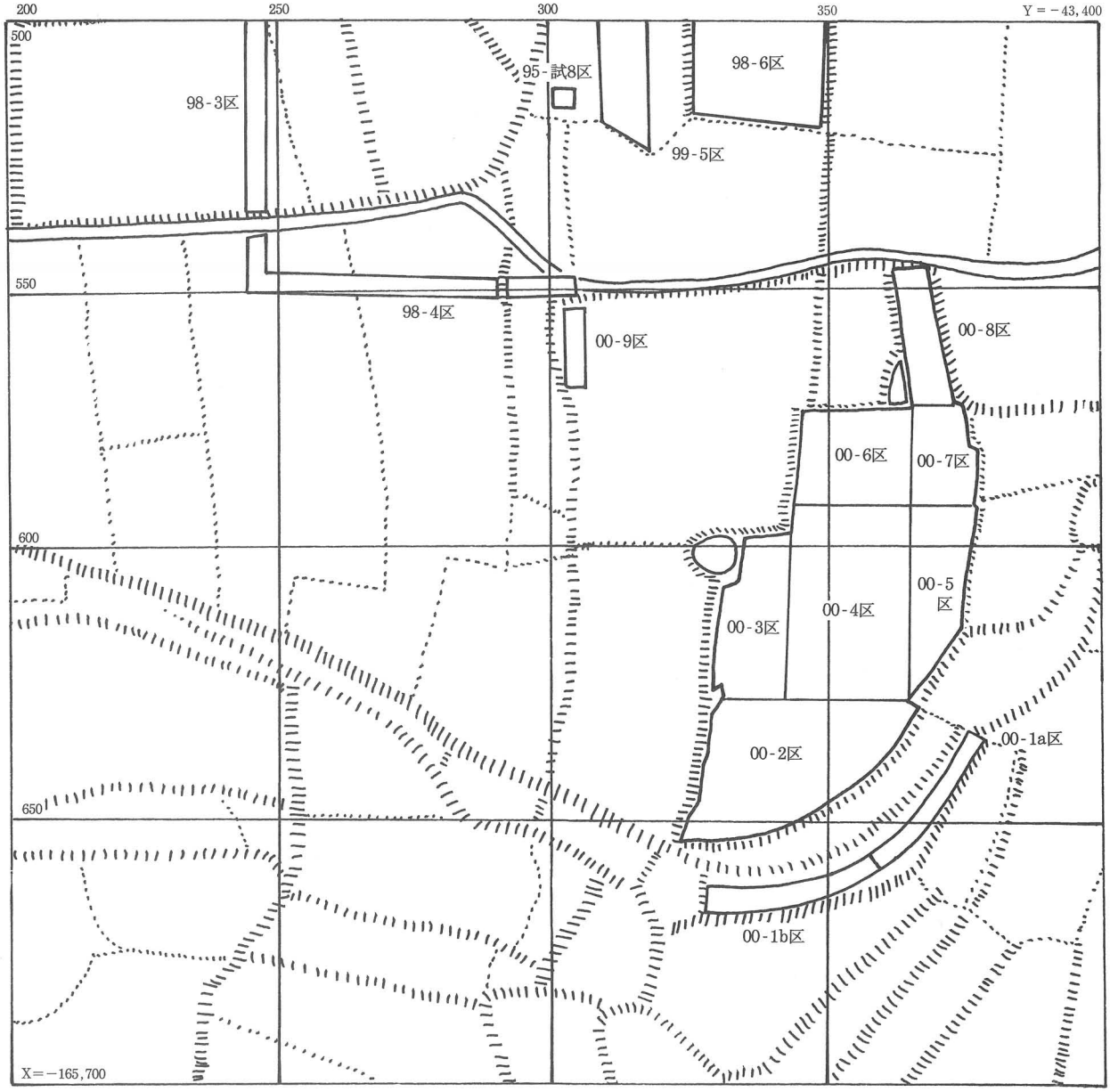

200
250
300
350
Y = −43,400
500
550
600
650
X = −165,700
98-3区
95-試8区
98-6区
99-5区
98-4区
00-9区
00-8区
00-6区
00-7区
00-5区
00-4区
00-3区
00-2区
00-1a区
00-1b区

図３　調査区位置図

2．陶邑以前の陶器南遺跡（図４～６　図版８a～c）

陶器南遺跡についてはこれまでに本府から７巻の概要報告書が刊行され、陶邑で須恵器生産が行われていたころの集落の状況、さらに中世の土地利用実態が分析されてきた。また、須恵器生産工人の動向と中世集落の展開については調査成果に基づいた考察も発表されている。詳細については各文献に譲り、本節では須恵器生産以前の遺跡の実態を遺物を中心にして紹介したい。

まず、府内では後期旧石器文化にかかわる遺跡、すなわちナイフ形石器を示標とする遺物の発見箇所は250カ所以上にのぼる。陶器南遺跡周辺では堺市田園遺跡、辻之遺跡、伏尾遺跡などで確認されている。また、晩期旧石器文化にかかわる有舌尖頭器が堺市野々井遺跡・小角田遺跡などで発見されている。いずれも、狩猟道具としての石器槍先が単独で発見されていることから旧石器人の定住した遺跡と位置づけるよりむしろ、泉北丘陵内の広域に狩猟、採集活動が行われた痕跡と考えられる。

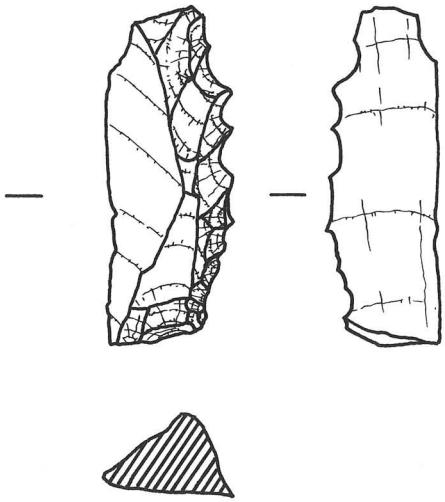
今回調査中、調査区南の馬池が渇水で干上がった。このおり、流出した砂利層中にナイフ形石器と思われるサヌカイト片を確認した（図４．１　図版８a）。一方向から連続的な敲打が認められ、全長4.5cmをはかる。上端部は欠損している可能性もある。基部には自然面が残る。

縄紋時代になっても、当遺跡周辺は狩猟活動の場だったようだ。顕著な縄紋集落は確認されていない。これまでに陶器南遺跡からは二点の石鏃が確認されている。凹基形のサヌカイト製だ。近隣の陶器千塚から平基式、薄手石鏃も見つかっている。側辺が基部でやや屈曲する特徴から縄紋時代後・晩期のものだろう。今回の調査でも遺物包含層中からサヌカイト製の石鏃（６区）と石サジ（９区）が発見された（図４．３・６　図版８b・c）。石鏃は全長2.5cm、基部の一方を欠損する。自然面を残さず、丁寧に連続剥離形成されている。石サジは扁平な剥片の一方に刃部をつくり、刃部に直行してツマミ状の突起を形成するもので、最大長6.4cmを測る。

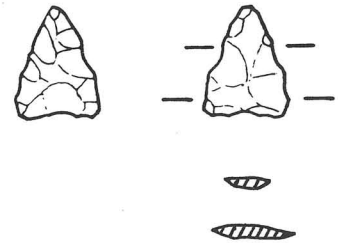
次に、弥生時代・古墳時代前期の状況はこれまで周辺からは遺構が発見されておらずよくわからない。95年の調査で二点の緑泥片岩製石包丁が見つかっていることから谷に沿って、水田耕作が営まれた様だ（図６．２・３）。

大正のはじめには陶器村の谷から銅鐸が発見されたという。この銅鐸は発見直後に所在がわからくなった。数年後、近くの民家の所蔵品だったひとつの銅鐸が転売され、考古学会にも紹介された。紹介された銅鐸は陶器村で大正のはじめに発見された銅鐸と同一である可能性が高いと考えられている（図６．１）。しかし、谷から発見された銅鐸が陶器南遺跡の北に地名の残る谷だったのか、単なる地形としての谷だったのかはわからなくなってしまった。現在、陶器南遺跡の北にある谷という字名の地点が、銅鐸発見推定地とされている。

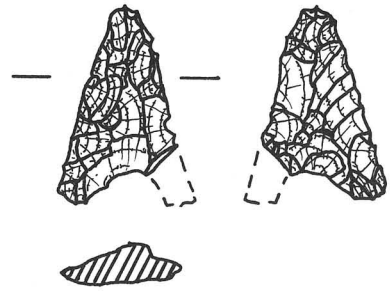
他に、陶器村発見という弥生小型倣製鏡が紹介されている（図５．１）。これも銅鐸と同じ頃に京都大学の富岡謙蔵氏によって確認された資料で、大学講義で紹介されたものである。富岡氏は大正７年に逝去された。大正９年に弟子の梅原末治氏によってまとめられた遺稿集『古鏡の研究』に鏡の拓本が掲載されている。そして、大正15年には東京国立博物館の後藤守一氏によって



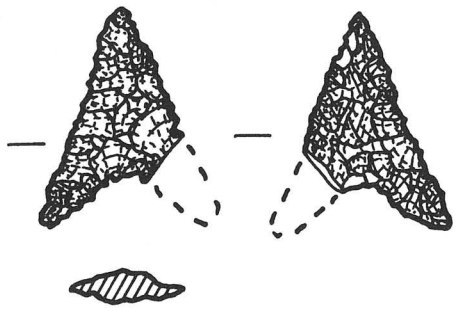
1．馬池採集



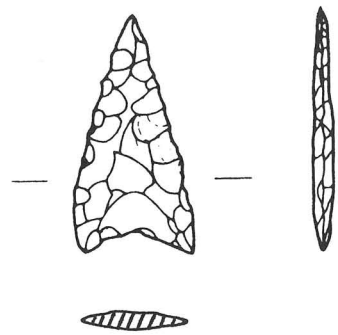
2．陶器千塚(93-B区)出土



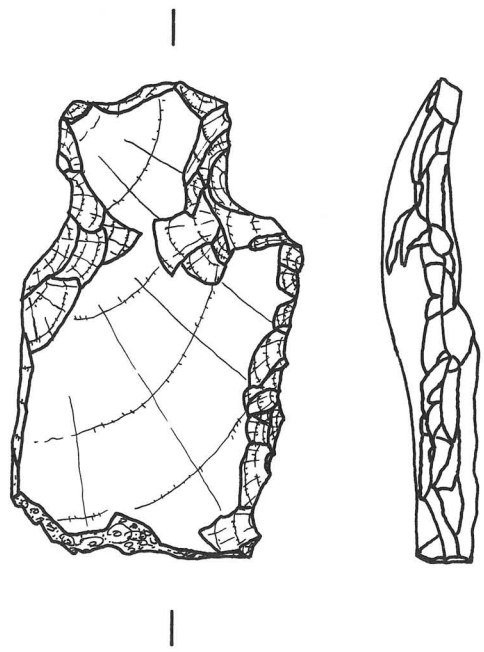
3．今回調査区(00-6区)出土



4．95-6区出土

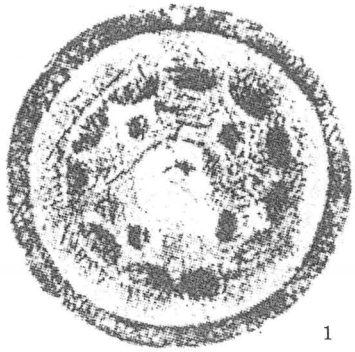


5．99-3区出土



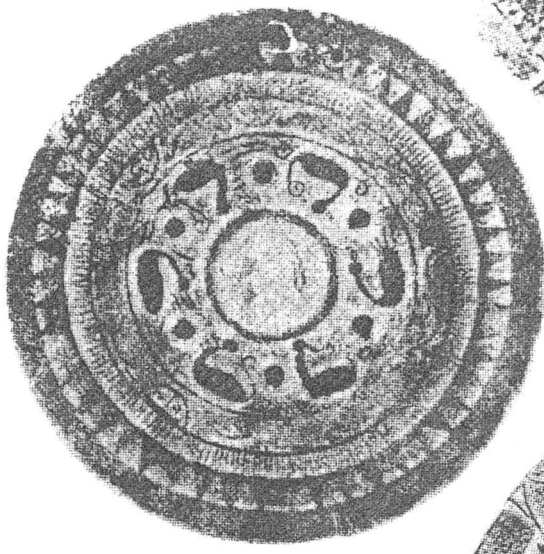
6．今回調査区(00-9区)出土

図４　遺跡周辺の旧石器・縄紋時代石器（実大）

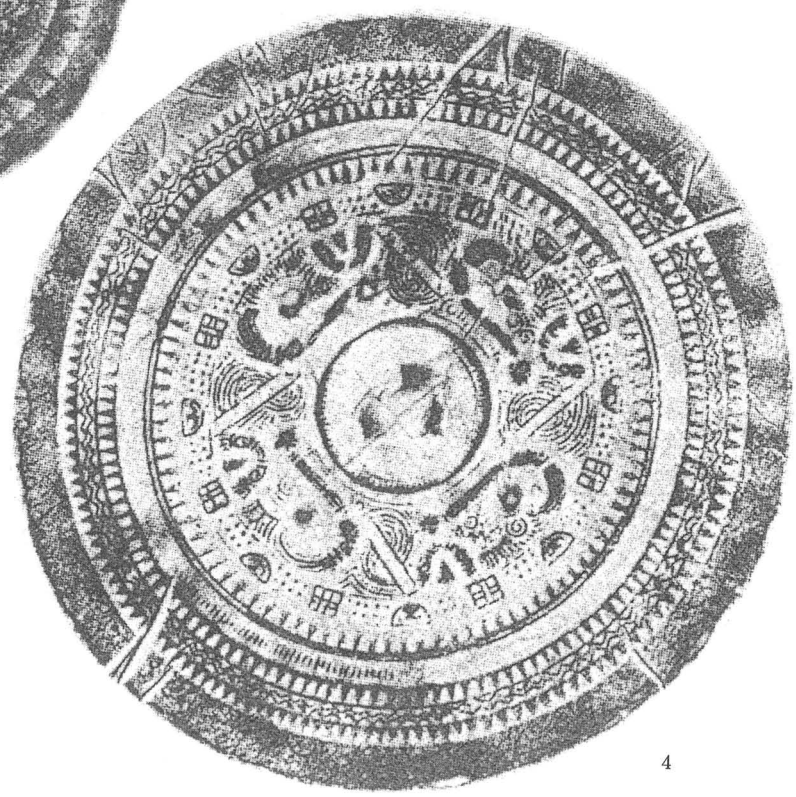


1

2



3



4

1．弥生小型倣製鏡(径6.3cm)
2．だ龍鏡(径17.3cm)
3．倣製獣帯鏡(径12.3cm)
4．だ龍鏡(径17.7cm)

図５　陶器村発見の古鏡（１～３）・大野寺蔵鏡（４）

集成された『漢式鏡』に堺市陶器村発見として紹介されている。しかし、その時点で鏡の所有者は確認出来なくなっている。この鏡は四つの小乳と連弧紋鏡を内区にもつ小型鏡で八尾市亀井遺跡・神戸市青谷遺跡などで発見された近畿形の弥生倣製鏡と共通する特徴をもつ。

他にも堺市陶器村発見の鏡が二面知られる。だ龍鏡（17.3cm）と倣製半肉彫り獣帯鏡（12.3cm）で古墳時代前・中期にわが国でつくられた鏡である（図５．２・３）。いずれも富岡謙蔵氏の手拓が紹介され、陶器村の古墳発見という。記述を評価すれば陶器南遺跡西北の陶器千塚古墳群から発見されたと考えることが素直だろう。陶器千塚古墳群はかつて百基以上の古墳が存在していたらしい。大半は戦前に破壊されてしまった。昭和25年に森浩一氏によって31基の古墳のみ確認、分布調査されている。その時、破壊にあった二基の古墳から鏡の出土が伝聞されている。実物は明らかでない。

陶器千塚古墳群は須恵器工人が造営主体で古墳時代後期に築造されたことがその後の調査などで明らかにされている。ところが、紹介されている二面の鏡はそれより古い古墳時代中期のもので伝聞の鏡と合致するならば古い時期に営まれた古墳を推定せざるをえない。また、前者のだ龍鏡とよく似た鏡が堺市土塔の大野寺に保管されており、三つの鏡が発見された時期はほぼ重なるという。このことを評価すれば、陶器村の北の平野部に未知の中期古墳が存在し、そこからの一括発見だった可能性もある（図５．４）。

以上の様に弥生時代から古墳時代前期にかけては古くに発見された遺物の伝承が知られるのみで集落や土地利用の実態は判然としない。現状では、須恵器生産にかかわる人々が陶器南遺跡に定着する古墳時代後期までに有力者が台頭する基盤が出来ていたとは考えにくい。

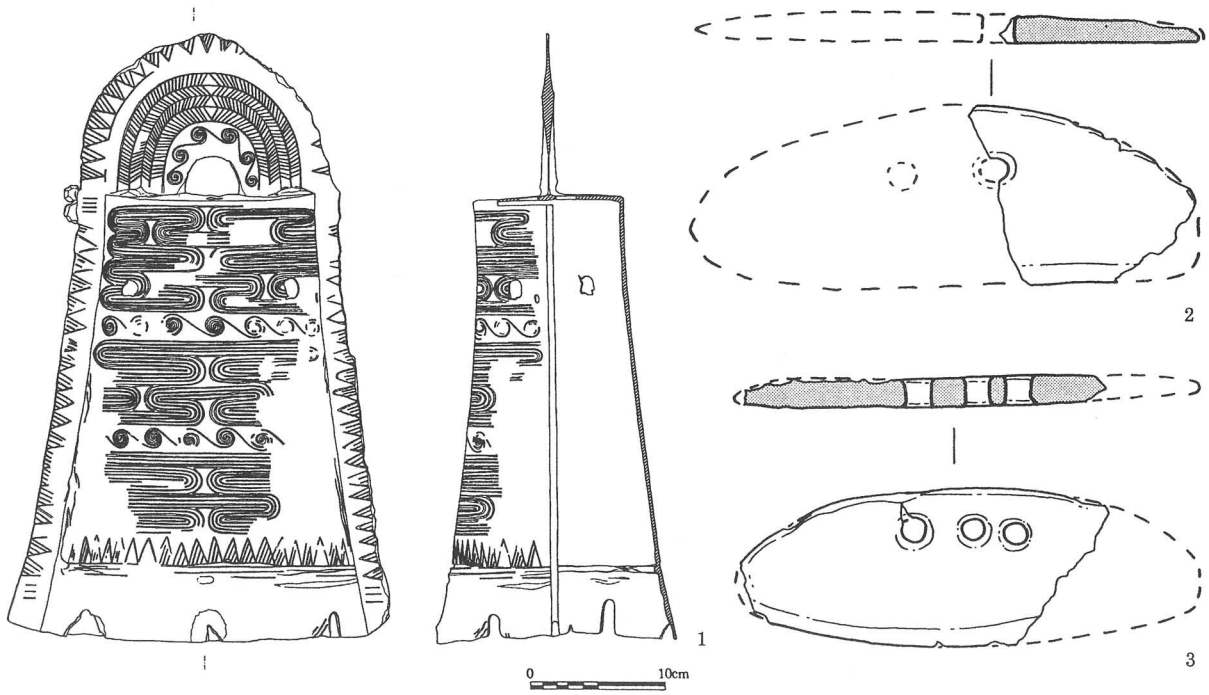


図６　伝陶器村出土銅鐸と95－２区出土石庖丁（１／４）

第２章　発掘調査

１．基本層序

調査区は地形に沿って複雑な形状を示す。大要は南北約80m、東西約40mの方形部分（２～７区）、その南に幅３m、長さ約140m帯状部分（１区）、方形部分の北に取りつく幅約５m、長さ約20mの帯状部分（８区）、方形部分の北西に南北約15m、東西約５mの帯状部分（９区）である（図７　図版１）。

このうち、１区は傾斜面に位置し、遺構は認められず、遺物を含む上方からの客土によってテラス状に整地されていた。２～７区は本来小山状の地形だったものを大規模に削平、整地したもので、遺構・遺物包含層は２区の南端、６・７区にのみ認められた。残り部分はわずかな耕土を除去した段階で地山赤褐色粘土層となった。８・９区は東が高く、西に低いゆるやかな傾斜面をテラス状に削平、造成したもので何時期かに及ぶ水田耕土、床土の互層堆積が認められ、遺物包含層を形成していた（図８　図版２）。

遺構の認められた２・６・７区の基本層序を概観すると現代の水田耕土（黒褐土）の直下、10～50cm程度の床土（茶褐土・暗茶褐土）が認められ、ところによってはこの組み合わせの互層堆積あり、地山（黄褐粘土・赤褐粘土）に至る。地山直上には暗茶褐色の鉄・マンガンの沈着が認められる場合もある。この沈着があるところには遺構が残存しており、形成されていないところは近年の削平で整地された部分と考える。遺構埋め土は主に灰褐土・暗褐粘土に地山粘土ブロックや砂利が混ざる場合が多い。埋め土の色調などから遺構時期差を認めることは出来なかった。

２．飛鳥時代（図９　図版３～４）

２区南端に掘立柱建物３棟と土坑・溝などを検出した。遺物はその直上から整理箱１箱分の土器が見つかった。また、１区を整地した造成土は２区が起源と考える。ここからも飛鳥時代の土器が整理箱２箱分見つかっている。この地域には飛鳥時代以外の遺物が包含されていないことから遺構の時期は該当期であると考える。

掘立柱建物２－１はほぼ南北に2.4m、東西に3.0mを測る二間×二間の小規模な建物で、地形に沿って建てられた倉庫と考える。柱穴埋め土は暗褐粘土・淡褐土、柱痕跡や抜き取り穴などは残っていない（図９左下　図版４c・d）。

掘立柱建物２－２は桁之2.7m、梁間2.1mを測る二間×二間の小規模な建物で、掘立柱建物１同様に、倉庫と考える。柱穴埋め土は暗褐粘土・淡灰褐粘土で柱痕跡や抜き取り穴などは残っていない（図９右下　図版４b）。この他、柱穴と考えられそうな同規模の土坑群を30基以上確認している。遺物は含まれていなかった。このうち、土坑２－１と溝群は表土によく似たブロック土が含まれることから、近世以降と考える。

図7　1～9区遺構全体図（1／400）

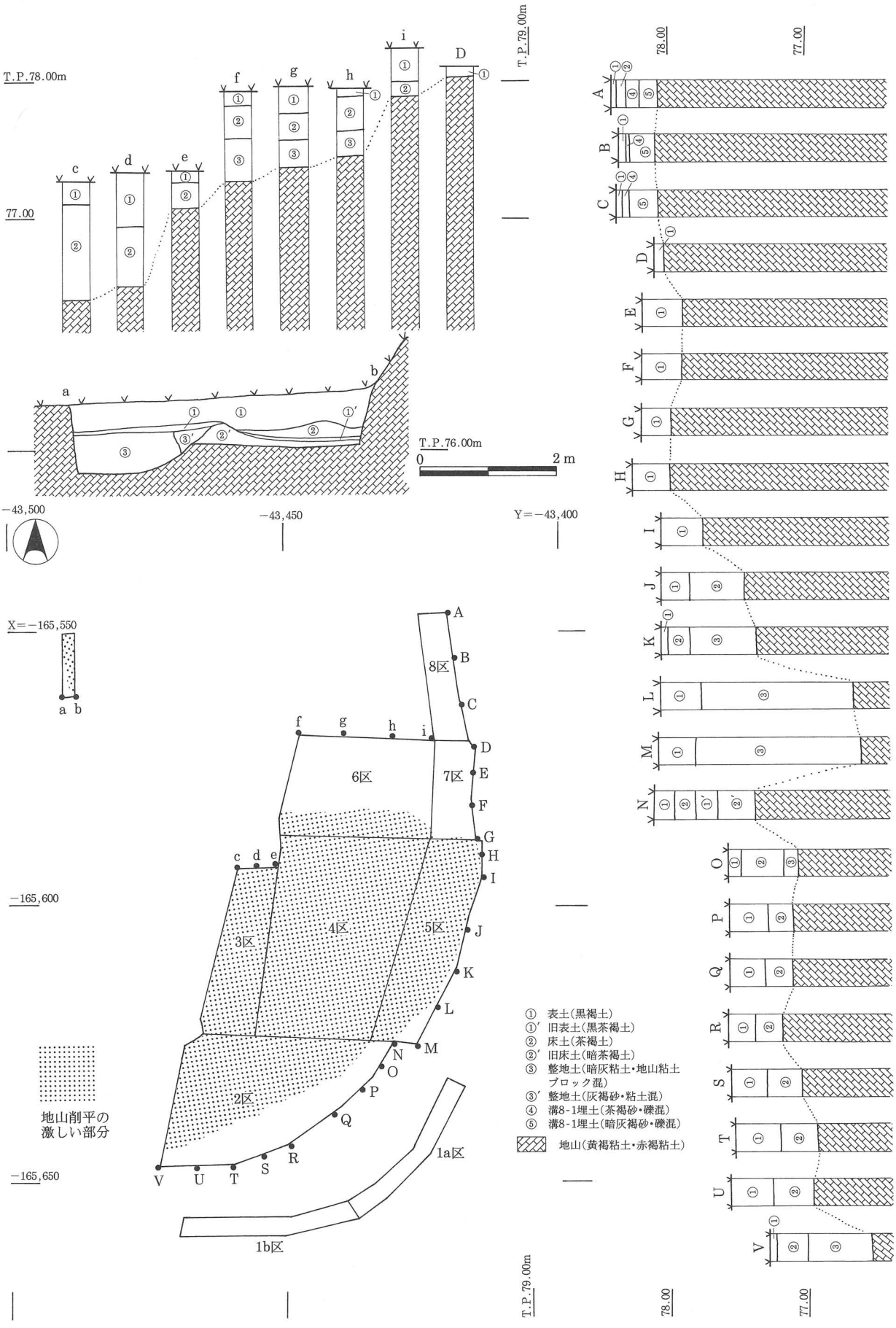


図8　地区割図（1／1000）及び土層柱状図（1／40）

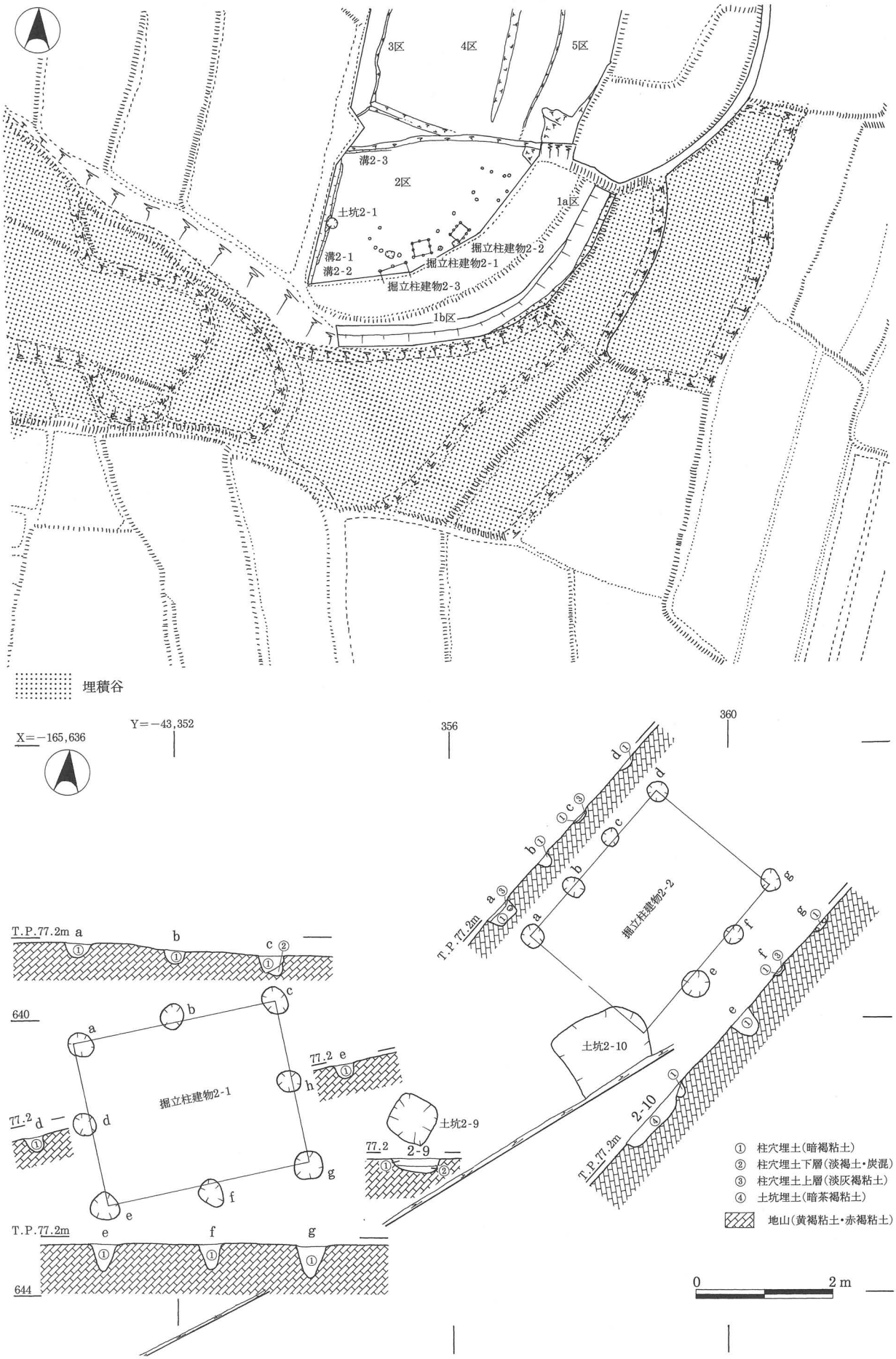


図９　１・２区遺構図（１／1000）及び主要遺構詳細図（１／80）

3．発見遺物（図10　図版8e・g）

須恵器・土師器がある。須恵器坏は口径がもっとも小さくなる型式で蓋は外面を回転ヘラ削りせず、無調整のものもある。稜線ははっきりせず、口縁端部は厚いまま、丸くしあげる。返りのある方を坏身と考え図化した。しかし、蓋・身の区別は明瞭でない。坏身はいずれも口縁端部の内傾が著しい。口縁端部が受け部先端よりやや高い型式（図10．15～18）と、口縁端部が受け部先端とほぼ同じ高さかわずかに高いだけの型式（図10．6・11～14）がある。前者は飛鳥Ⅰ型式、後者は飛鳥Ⅱ・Ⅲ型式の特徴を示す土器である。

また、宝珠つまみをもつ扁平な坏蓋、屈曲部の少し内側に高台をもつ坏身が少量見つかっている（図10．21～25）。これらは飛鳥ⅣまたはⅤ型式の特徴を示す土器である。

坏の他に低脚の高坏、壷・甕、器台、磚などが見つかっている。壷には台が付くものと丸底のものがある。磚は小片で幅4.6cm、縦横に粗い削り目を残す。

須恵器には焼け損じて亀裂の走るもの、焼きが甘く軟質なものも含まれる。それは陶器南遺跡の調査でこれまでに発見されている古墳時代後期・奈良時代前期の須恵器のあり方に共通する。一般集落で使われていた土器群と考えるよりむしろ、近隣の窯から運び込まれた須恵器の選別・集荷・出荷にかかわる遺物だろう。また、土器の型式幅は本調査区内で飛鳥時代を通じて須恵器生産にかかわる活動があったことを示唆する。これまで陶器南遺跡の調査では飛鳥Ⅰ型式直前に位置づけられる飛鳥寺下層段階の遺構・遺物群、平城Ⅰ型式とそれに続く奈良時代前期の遺構・遺物群が確認出来ている。今回の発見によって古墳時代後期から奈良時代前期まで少しずつ場所を変えながら、連綿と活動が行われていた実態が把握出来た。

4．中世（図11・12　図版5・6）

6～9区から遺構・遺物を発見した。掘立柱建物、溝、土坑などがある。近接する98年度調査4～6区、99年度調査8区でも、中世の遺構・遺物が多数検出されており、一連遺構と考える。

掘立柱建物6－1は桁之7.0m、梁間4.1mを測る三間×一間の東西棟で、東に土坑6－1が取りつく（図12　図版6）。柱穴の埋め土は暗褐粘土、柱痕跡や抜き取り穴などは明瞭でない。埋め土中に瓦・瓦器片が含まれていた。南側の柱列は西隅が二柱穴になり、その東には浅い土坑6－15があり、西から二番目の柱穴は発見出来なかった。そして、西から三番目の柱穴は西隅の柱穴同様に二柱穴だった。また、発見出来なかった東から二番目の柱穴の位置から北約2mのところに二柱穴が確認された。以上より、この建物は南西に入口があり、それによって一部の柱穴がなく、それを補強するため、東西と北に二柱穴の柱を建てたと推定することはできないだろうか。

掘立柱建物6－1の東に取りつく土坑6－1は浅い土坑である。埋め土最下層は乳白粘土でほぼ完形に近い三つの瓦器碗と青磁碗小片が残されていた。土坑の北側は硬く締まった白褐強粘土で土師器・瓦片などが含まれる。作業台、あるいは崩壊したつくりつけカマドの可能性もある。96年度3区の調査では六間×二間の南北建物の南側に土坑が取りつき、煙道状の溝と炭などから

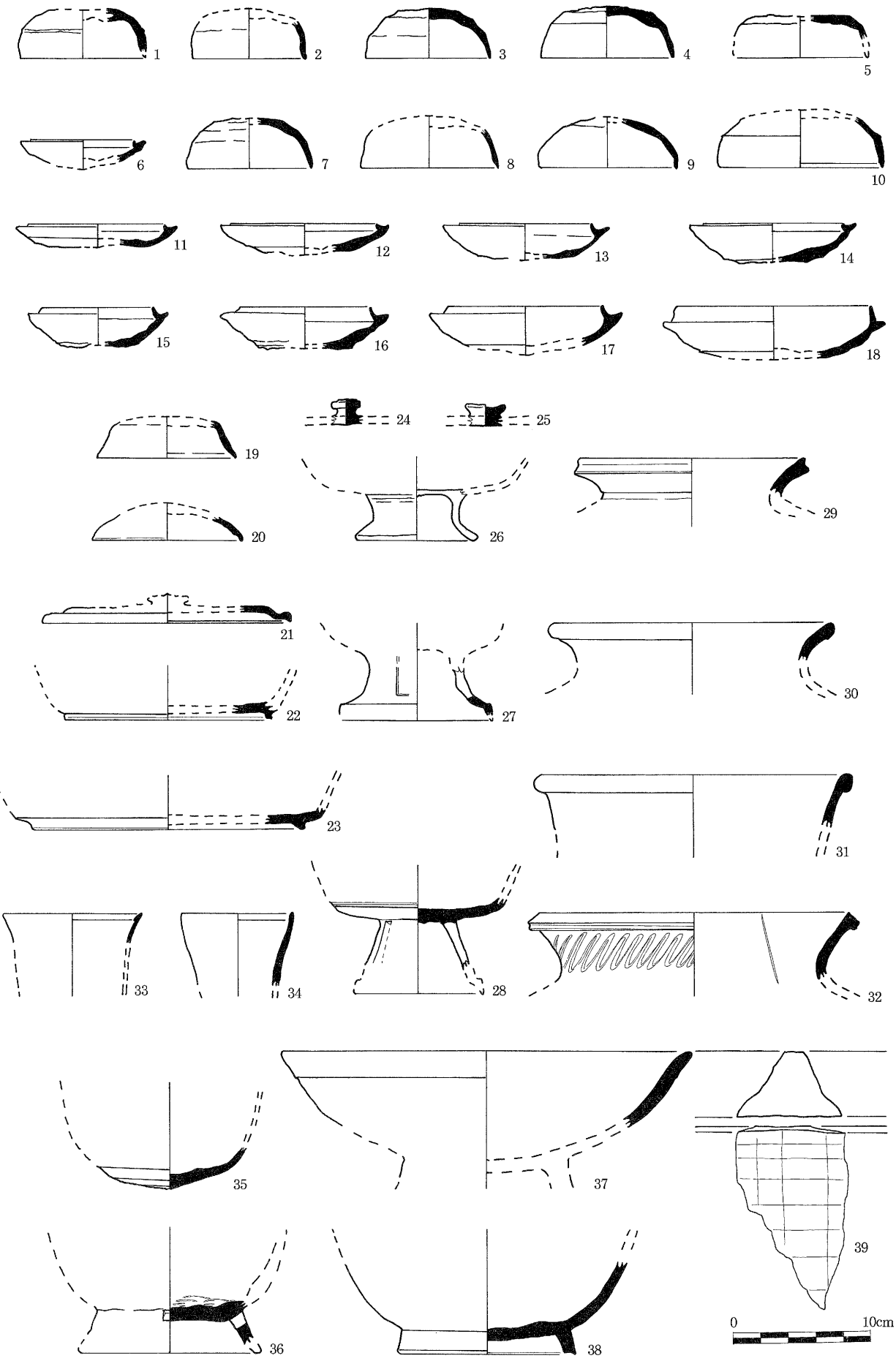


図10　1～2区発見飛鳥時代土器（1／4）

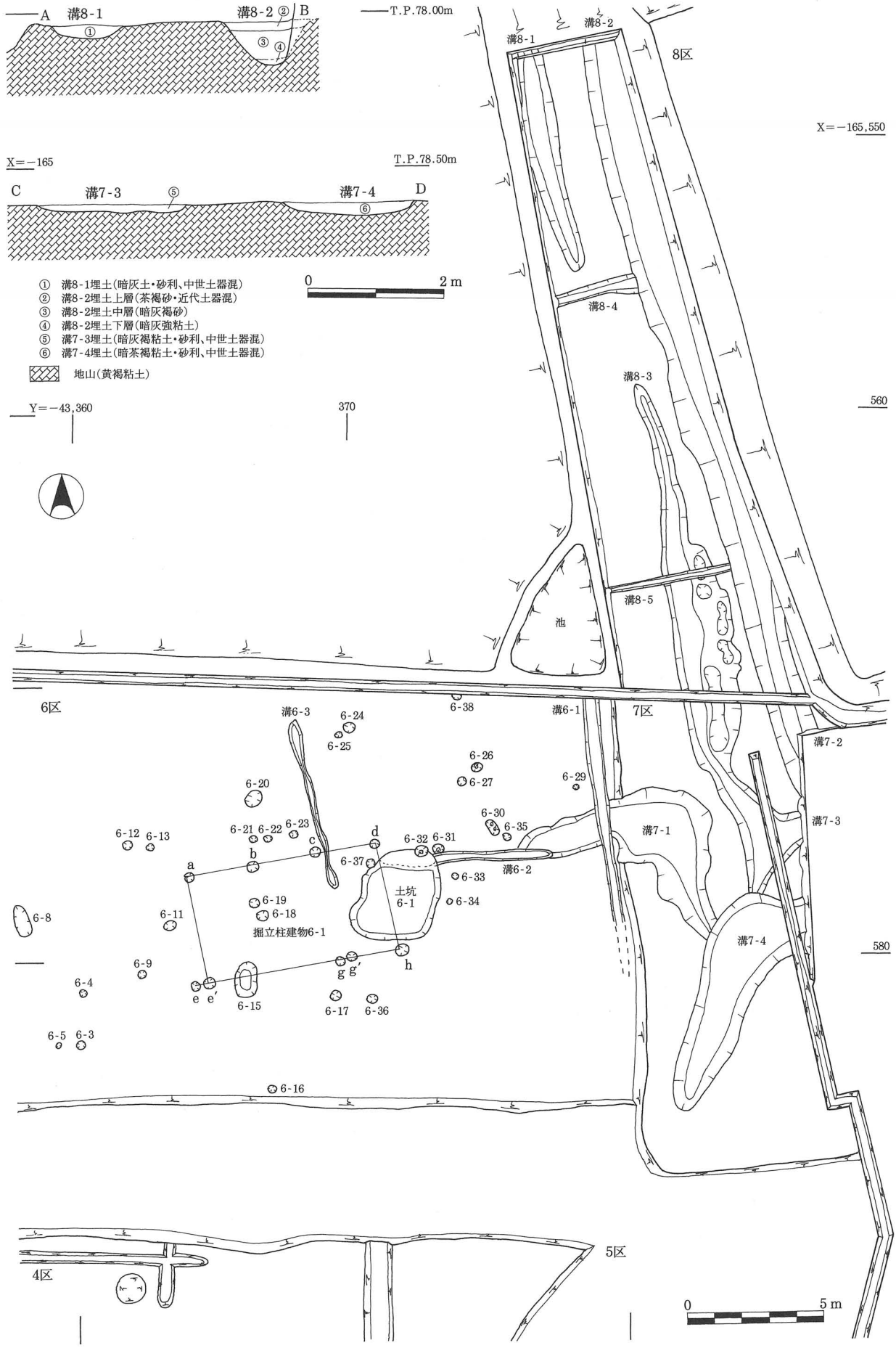


図11　6～8区遺構平面図（1／200）及び溝断面図（1／80）

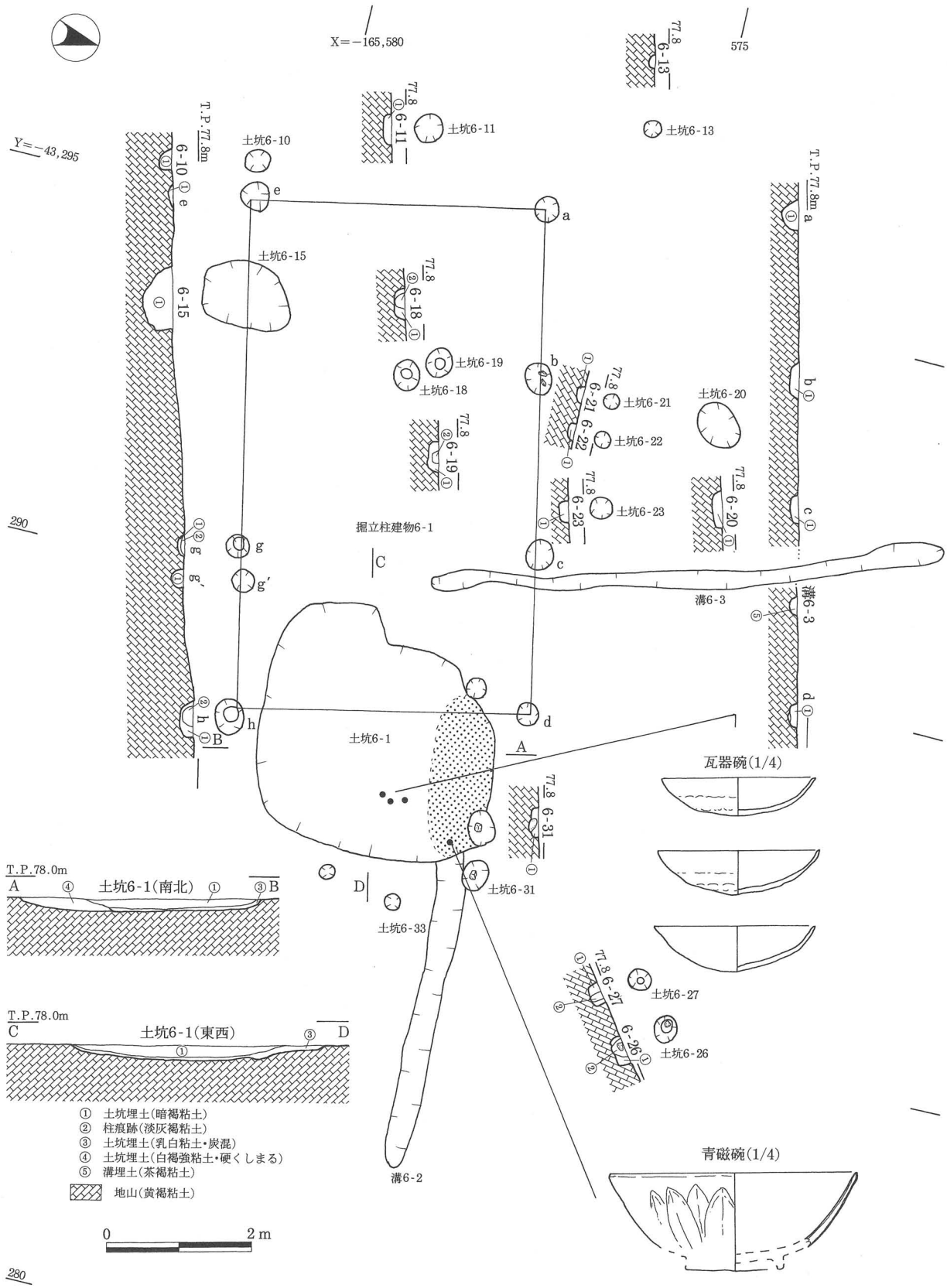


図12　6区遺構詳細図（1／80）

カマドの可能性が指摘されている。今回の調査では炭混じりの間層が少規模に見られる程度だった。

土坑６－１の東に溝６－２が取りつく。また、掘立柱建物６－１内から北に形状の似る溝６－３が伸びる。両溝が建物と同時期である確証はないが、同時期とすれば排水溝だった可能性を指摘できる。この場合、建物の床面と検出面との間に高低差はあまりないことがうかがえる。

７・８区で中世の土器・瓦などを含む溝を５条確認した（図11　図版５a～c)。溝８－１・溝８－２・溝８－３は流水による堆積土が認められ、排水にかかわると考える。比高差はあまりないものの南から北に水が流れる。溝８－３は南に伸び、７区にいたり、東方向に折れ曲がる（溝７－３)。溝８－１・溝８－３・溝７－３は中世より新しい遺物は含まれない。その一方、溝８－１には近代の遺物が含まれた。これらの遺物は溝が機能していた時期を示唆するものと考える。堆積状態とあわせて溝８－１・溝８－３が古く、水田面を東に拡張して溝８－１に切り替わったと考える。溝群は水田区画と排水施設を示すものだろう。

他に、中世の遺物を包含する不定形な溝７－１・溝７－４がある。溝７－１は西に折れ曲がり６区に伸びる（溝６－４)。そして、溝７－１の南端は溝７－４にとりつく。溝７－４は西に折れ曲がり調査区外へと続く。いずれの溝も近世・近代の遺物は含まない。しかし、時期や機能は確定出来ない。

５．発見遺物（図13　図版９c・d)

発見された遺物には土師器・瓦器・瓦・青磁などがある。器種は羽釜・スリ鉢・瓦器碗が多く少しの土師皿があるのみで、他は極めて少ない。

瓦器碗はつくりが粗く、高台が省略され、暗紋も形骸化するもので室町時代の特徴を備える。これまでの調査では平安時代末期と鎌倉時代中期の特徴を示す瓦器碗が発見されていた。今回はこの時期に対応する瓦器碗はない（図13．１～７・９・10)。

瓦器羽釜は口縁部が著しく内傾するもの(図13．18～20)、緩やかに内傾するものがある(図13．21・22)。概して、前者は口縁端部をつまんで立ち上げる小型品で器壁は薄く、後者は口縁端部を平らに仕上げる大型品で器壁は厚い。その他、脚をもつ羽釜(図13．23)、タタキ甕(図版９c７)がある。

東播系のスリ鉢は口縁部を一段厚く仕上げ、一か所受け部をつくり出す。外面は粗くナデ、粘土紐を巻きあげた痕跡を残す。底部は無調整である。内面はていねいにナデ仕上げる。いずれも明灰白色で堅固に焼かれている。口縁端部が上下に張り出す特徴から13世紀以降のものだろう。生産地、明石市神出窯群が生産器種をスリ鉢に集約化する頃のもので、中世の京都でもスリ鉢といえば東播系がほぼ100%を席巻する頃のものである。本調査区でも一棟の住居に対し、10個体以上も発見されており、食生活を復元する上で重視できる。

青磁碗は龍泉窯系で暗緑褐色の釉薬が厚くかかり、外面に大振りの蓮華紋様を施す(図13．11　図版９b８・９)。この碗は掘立柱建物６－１の東に伴う土坑６－１から瓦器碗（図13．５～７　図版８h・i）と一緒に発見された。

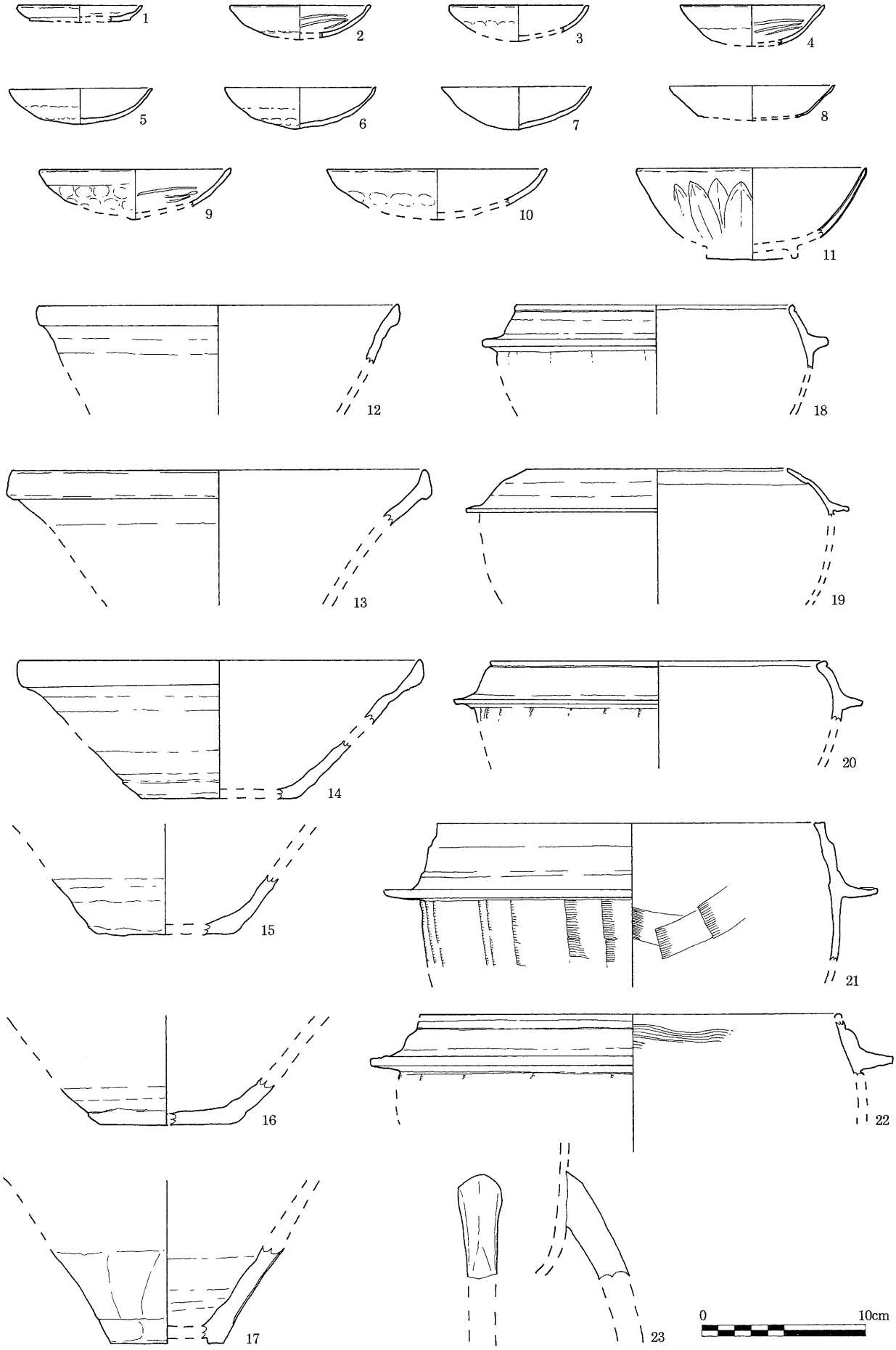


図13　6～9区発見中世土器（1／4）

第３章　老ノ池地区の調査

１．調査位置と遺構（図14　図版７b・d）

調査区は前章報告の１～９区の北東500mのところに位置する。陶器川によって形成された開析谷内の南斜面に位置し、下流約100mの北側段丘上に小角田遺跡と窯跡群（ＭＴ250・251）、下流約1500mの北側段丘上に陶器千塚が広がる。その一方、上流部の北側斜面には老ノ池１号窯（ＭＴ19）・２号窯（ＭＴ20）、中池１～３号窯（ＭＴ302～304）、阿弥陀池１～５号窯（ＭＴ305～308）がある。以上の窯跡に伴う遺物として古墳時代後期・飛鳥時代の須恵器が採集されている。調査区は試１区（長さ40m、幅1.5m）・試２a区（長さ20m、幅1.5m）・試２b区（長さ10m、幅1.5m）・試３a区（長さ30m、幅1.5m）・試３b区（長さ24m、幅1.5m）の５つに分かれる（図14上）。

試１区は開析谷南斜面を降りきったところに位置する。表層（水田耕作土）を除去すると約0.3mの遺物包含層（水田床土）が堆積しており、古墳時代後期と中世の遺物が含まれていた。堆積状況から南上方より流出した土が起源と考える。その下には粗砂・微砂が互層に堆積した河川堆積物が見られた。陶器川の氾濫によるものだろう。堆積の時期はわからない。表土下約0.7mのところで地山黄褐粘土に達した。地山は南から北に緩やかな傾斜が認められる（図14下　図版７b）。

試１区北隅で表土下0.5mのところに落ち込みがあり、淡青灰強粘土の厚い堆積があった。粘土中に須恵器甕・坏などが折り重なって含まれていた。この落ち込みは陶器川流路の一部が取り残され、池状によどんだ部分と推定する（図14下）。

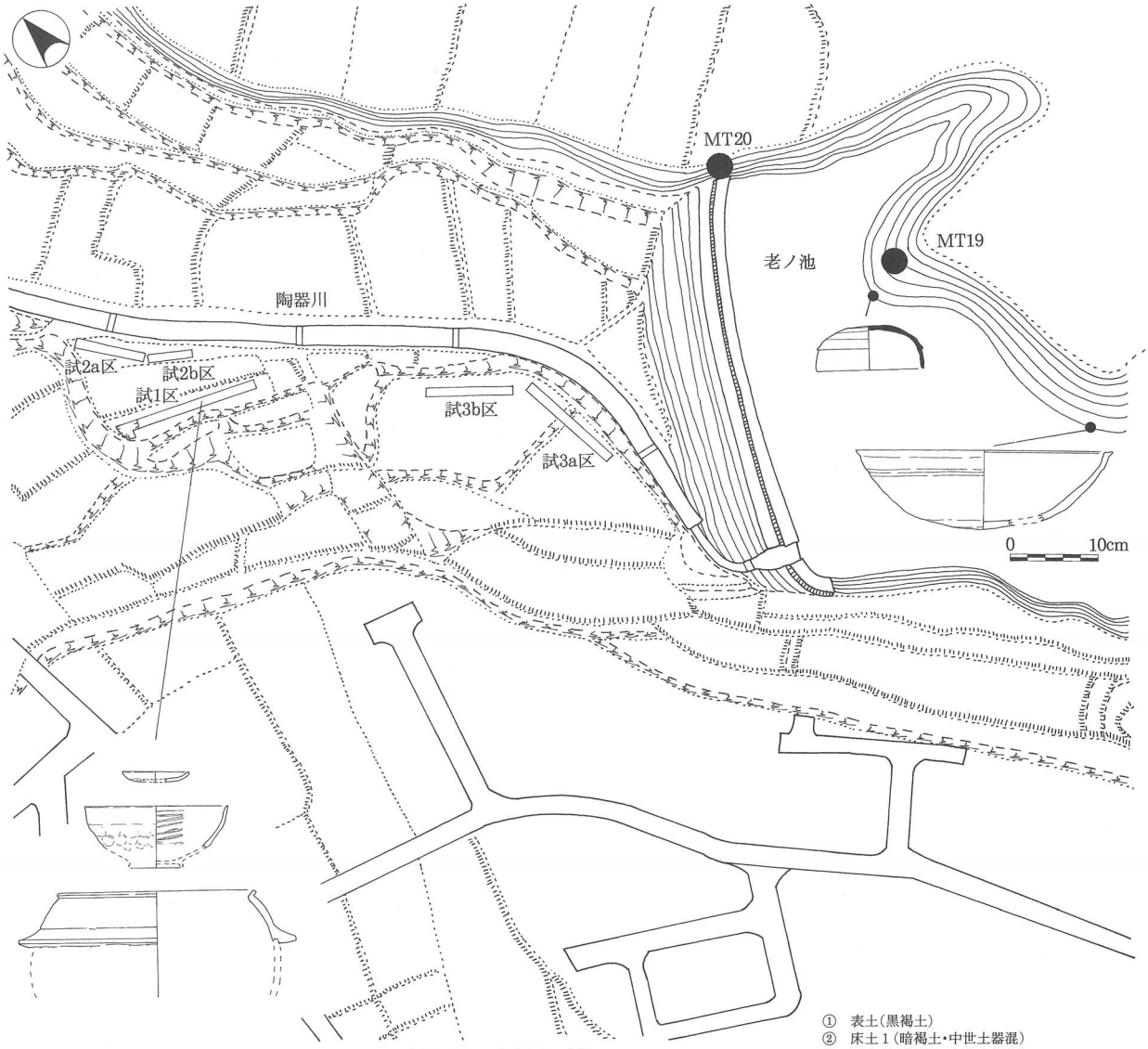
試２a・b区は開析谷の中央、陶器川の南岸に近接する。表土直下から陶器川による砂利堆積層があり、約1.5m掘り下げてもその状況は変わらなかった。堆積層中には少量の須恵器が含まれていた。上流から流されたものだろう。川底地山の深度は確認出来なかった（図版７d）。

試３a・b区は開析谷の南斜面中程のテラス部に位置する。表土直下に薄い遺物包含層があり中世の土器片がみつかった。その下は約1.0mの深さにわたり、流土の自然堆積層があった。堆積層中に遺物はなく、上方斜面が地崩れをおこし、テラスが形成されたと考える。その下の地山面は緩やかな傾斜である。堆積層中に遺構・遺物は見られなかったものの、調査地周辺には土器が散布しており、南側上方に古墳時代・中世の集落が存在したのだろう。（図版７c）。

２．発見遺物（図15　図版８d・f）

試１区北隅の落ち込みから大量の須恵器が発見されている（図15．２～８）。坏身は矮小化し回転ヘラ削りが簡略化され、口縁部の立ち上がりが短く内傾する。飛鳥寺下層段階と考える。その他、２個体分の甕、壷・台付き碗などがある。甕と一部の坏身は完形で埋没したものだろう。

試１区暗褐土・茶褐土層（水田床土）より中世の瓦器・土師器などが発見されている（図15.



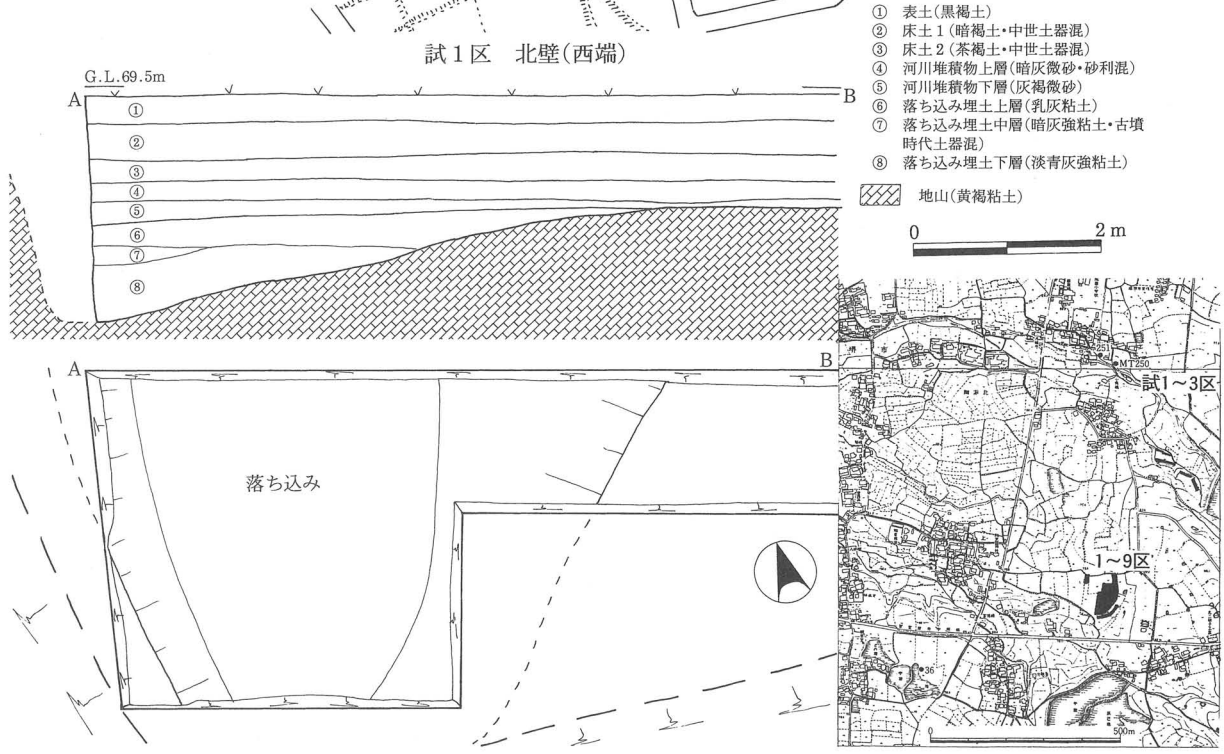


図14　老ノ池地区調査地位置図（１／2000）及び遺構詳細図（１／80）

9～12)。瓦器皿・碗は丁寧に磨かれ細かい暗紋が施されている。鎌倉時代前期のものだろう。東播系スリ鉢は口縁端部が上方にやや尖る。外面は粗く、内面は丁寧にナデ仕上げされている。瓦質羽釜は口縁端部を丸くつまみ上げ、折り返す。著しく内傾する小型品と器壁が厚い大型品がある。

調査に際し、老ノ池北岸の窯跡群の状況を調査した。老ノ池１号窯(ＭＴ20)は確認出来なかったものの、老ノ池２号窯（ＭＴ19）は池岸に窯体が崩落し再堆積していた。床面と思われる部分には粗い乳白砂が敷かれており、10cm角の須恵器甕破片が散乱する。乳白砂と甕の破片は製品を窯入れして据えるために置かれたと考える。整理箱２箱分を採集したが二次的に焼けたものが大半でほとんど接合しなかった。その他、窯側壁に接して坏蓋を確認した（図13．１　図版８d)。天井部を細かく丁寧にヘラ削りし、稜線と端部を鋭角的につくり出す特徴から須恵器定型化直後の段階（ＴＫ208)、あるいはその次段階（ＴＫ23）と考える。

その他、老ノ池２号窯（ＭＴ19）の南10mの池岸で中世すり鉢を採集した（図15．12)。直径18.9cmを測る薄手大型品で、底部はやや丸くなる。

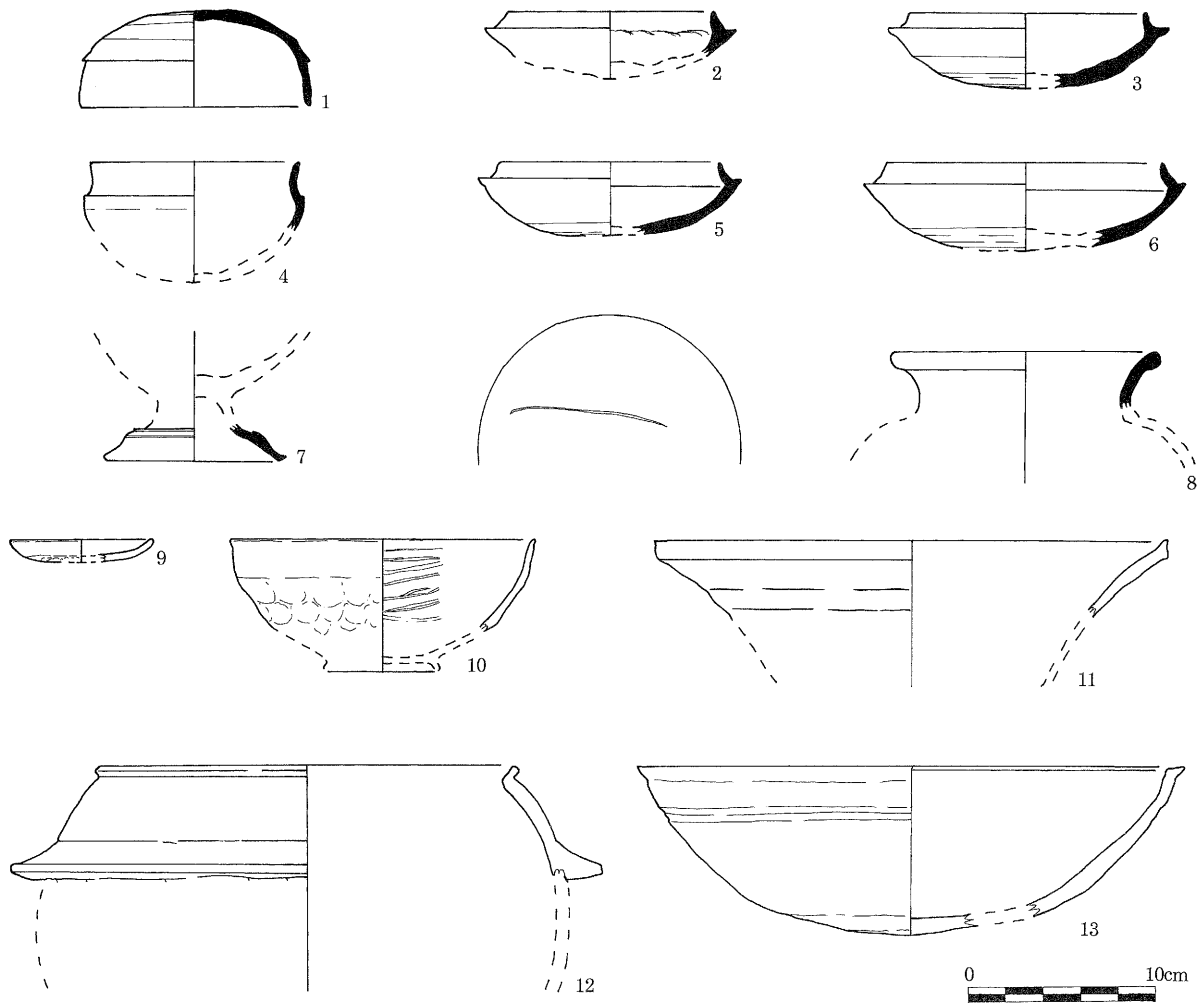


図15　老ノ池地区発見土器（１／４）

第4章　まとめ

1．須恵器生産にかかわる陶器南の集落

第1章で、陶邑以前の陶器南遺跡周辺について、歴史環境を概観した。本章では発見遺構を中心に須恵器生産にかかわる陶器南の集落について概観し、まとめとしたい。

古墳時代中期になって、泉北丘陵には窯業生産に関連した工人たちの集落が大規模に営まれるようになる。もっとも古い須恵器窯は堺市大庭寺遺跡から発見され、400年代はじめの時期が与えられている。そのころ、百舌鳥の台地上では、履中天皇陵古墳・仁徳天皇陵古墳など、巨大古墳の造営が頂点をむかえていた。大庭寺遺跡の須恵器は韓国南部の伽耶地域の土器と共通する特徴があるという。ただし、彼地から窯業生産にかかわる人々が大量に移住した痕跡はない。少数の技術者はこの地に定住したとしても大半は在地にくらした人々が須恵器生産にとり込まれたり農閑期に周辺から移動して須恵器生産に従事したと考える。泉北丘陵では弥生・古墳時代に大規模な水田開発が行われ、農業基盤から古墳造営を可能にした有力者が台頭した痕跡がない。須恵器生産が農閑期に行われたとしても陶器南周辺にくらす人々だけで大規模窯業生産が可能だったとは考えにくい。

定型化した須恵器がつくられ、窯の数も急増する頃になると、陶器南地域でも辻之・田園・小角田・陶器北（上之）で大規模な集落が営まれる様になる。もっとも古い集落は西暦470年ころの辻之遺跡から、続いて500年前半では田園遺跡から、後半は陶器南遺跡の東北（旧上之遺跡）・小角田遺跡からである。飛鳥時代に移って600年初頭頃は辻之遺跡、600年中頃は今回発見された陶器南遺跡の南西、700年初頭は陶器南遺跡の中央・辻之遺跡が再び活気づく。

奈良時代後半から平安時代にかけては窯業生産全体が終息、各遺跡の集落は閑散となる。集落が時期ごとに移動したり集散する理由は須恵器窯の造営場所をかえるからで、窯の移築は燃料となる薪を周辺から切りつくしてしまうからだろう。

さて、陶器南周辺で発見される集落は単に焼き物を焼いていた職人の集落という性格ではなく統括する支配者が製品を選別し、倉庫に保管、陶器川や前田川を使って順次輸送するための基地だったと理解する。つまり、王権の支配下にある物流拠点だ。生産された須恵器は石津川河口の四ツ池遺跡などを通って全国に流通したのだろう。今回調査した試1区は、陶器川の形成した谷の南岸に位置する。岸辺の落ち込みに完形の甕・坏などが落とされていた。搬送の際に転落したもの、途中の破損で廃棄されたものの可能性もある。今回調査では搬送の実態を示す流路を人工的に制御した遺構は検出出来なかった。落ち込み状の遺構自体、人工的に形成されたよどみだった可能性もある。今後の調査において留意すべき点だと考える。

さて、当時の王は半島のハイテク技術でつくられた焼き物、須恵器を宮廷の食器として独占することなく、広く庶民に流布させた。古墳時代後期以降、西日本の集落や古墳を発掘調査すると

普遍的に須恵器が発見される。その技術の発進源は陶邑の工人集団が担っていたのである。

陶器地域の北側に陶器千塚と呼ばれる古墳群があった。100基程度あったらしいが今はほとんど壊されてしまった。この古墳は埋葬施設に須恵器窯と共通する焼成施設をつくったり、須恵器製の棺を納めたものもあり、工人集落の墓域と考えられている。古墳が権力者のみ営まれていた時代に、小規模ながら前方後円墳を造営し、鏡を副葬していたことなどを評価すれば、工人の中に政治的に躍進した者、勢力を強めた者がいたことを推測させる。

2．中世の陶器南の集落

須恵器生産が終焉すると人々はこの地域から一時移動したらしい。陶器南遺跡東の丘陵を中心に再び集落が展開する時期は平安時代末～鎌倉時代である。

本年までの継続調査では南北約70mの中に８棟以上の大型建物や柵列などが並んで見つかっている。これらの建物は現在水田化している平坦面を単位に発見される。したがって、付近の雛壇造成による丘陵の開発は中世にさかのぼると推測できる。近年まで見られた田園風景は鎌倉時代の風景に合致するわけだ。それは、古墳～奈良時代の集落が水田によって削平、整地されていることにも符合する。

このような開発は国家・天皇が土地や収穫の租税を掌握していた時代が終了し、武士や土豪による開発地が私有財産となり、有力者同志が競い合って耕地を拡大しようとした現れではないだろうか。発見された大型建物は積極的な水田開発がにわかな富みを蓄積させたことを物語る。現在、丘陵の高所は宅地化が進んでおり、調査は及んでいないが東の谷（老ノ池方面）にも土器・瓦が大量に流れ落ちていることが確かめられたので、開拓期の集落は南河内でも有数の規模だったと予想できる。

陶器南の中世集落が大規模だった理由として、米づくり以外にも木綿や絹つくりなど、別の産業を考えるべきだ、という説がある。しかし、これまで、専業性を示す様な特殊な遺物は確認出来ていない。

また、建物の規模に対比して発見される土器は器種が固定され、数量も多くない。普遍的に見られるものは消耗品である瓦質羽釜・東播系スリ鉢・瓦器碗・土師皿のみである。調理具である前二者と食器である後二者を見るかぎり、そこにくらした人々の粗食が推測できる。すなわち、米に雑穀をまぜてスリ鉢でする。スリ鉢には注ぎ口が伴うことから汁状だったようだ。それを羽釜で加熱して瓦器碗で食べる。それは果たして、米が主になった粥だったのか、雑穀が主だったものか・・・。今回発見された土器群は室町時代の一棟の建物に伴うもので、なかでもスリ鉢が目立った。調理にてこずるものを余儀なく混ぜて食していた様に思える。

中世の開発も長続きしなかったようだ。南北朝の動乱から戦国時代の群雄割拠をへて、この地に有力者集団が台頭することはなかった。今回発見された中世建物は建物群中のもっとも南の高所に移動し、規模も１×３間と小さくなる。陶器南の集落の最終段階を示すと考える。

付載　明治四十二年発見の須恵器群について

調査に際し、陶荒田神社南の旧家に当遺跡周辺から掘り出されたという須恵器などの資料が伝わっていることを知った。これまでに公表されたことはなく、発見経緯も知られていなかった。

資料は須恵器三点と土師皿三点である。いずれも完形、良好な状態で「明治四十二年五月　字三ツ池田地床下ノ際之ヲ發掘セリ　大正七年九月十八日製」という発見地を示す箱書きを残す（図版10e）。包み紙の一部には記述通り、大正７年の新聞紙が使われている。

各資料の所見と若干の考察を示す。

１．口径9.7cm、器高13.5cmを測る完形の小型短頸壷である。口縁部はまるく折り返され、ほぼ直立する短い頸となだらかなくびれがある。底部は回転ヘラ削りによってまるくつくり出される。肩部分にサ字形のヘラ記号がある。暗青灰色で焼きは良い（図17．１　図版10b）。

２．口径19.1cm、器高29.0cmを測る完形の長頸壷である。口縁部はやや尖り気味につくり出され、ラッパ形に開く頸部を二条の沈線で三区分し、各区画に粗い波状文をめぐらせる。屈曲したくびれの下にほぼ球形の胴部が付く。胴部は内外面にタタキ目があり、外面上半部をカキ目仕上げする。下半部は格子タタキが、内面は青海波紋が明瞭に残り、底部はまるく仕上げられる。暗青灰色で焼きは良い（図17．２　図版10c）。

３．口径18.3cm、器高29.0cmを測る完形の短頸甕である。口縁部は折り返されラッパ形に開く短い頸となだらかなくびれがある。くびれの下は肩の張る球形の胴部が付く。胴部は内外面にタタキ目があり、外面上半部を粗くカキ目仕上げする。下半部は格子タタキが、内面は青海波紋が明瞭に残り、底部はまるく仕上げる。淡乳灰色で焼きはやや甘い（図17．３　図版10a）。

４～６．口径8.3～8.8cm、器高1.9cmを測る完形の土師器小皿である。口縁部と底部をまるく仕上げる。内面はナデ固められ、外面には指頭の痕跡が残る。形状からみて型つくりのようだ。近世・近代の供献品かもしれない。いずれも同じ明赤褐色、胎土に少量の石英やチャート粒を含む。在地産だろう。火痕はない（図17．４～６　図版10d）。

１～３については古墳時代後期、６世紀後半のものである。これまで陶器南遺跡では同時期の須恵器が大量に発見されているが変形したもの、焼け損じたものがほとんどで良好な完形品はない。つまり、以上の資料は流通段階で選別され、廃棄された失敗品とは考えにくい。

一方、資料はすべて貯蔵用土器で古墳の副葬品、供献土器に共通する。ただし、発見推定地は陶荒田神社鳥居南方の小さな谷地形で古墳の存在は予想しにくい（図16　図版７e）。

箱書きの出土地を評価すれば、完形壷類が一括してみつかる状況から、祭祀遺構に供えられた土器群だった可能性が推定できる。推定が正しければ、後身の陶荒田神社の立地を説明できる資料として重要だろう。しかし、箱書きの出土地を評価しないならば、陶器千塚など、古墳主体部から採集されたものかもしれない。

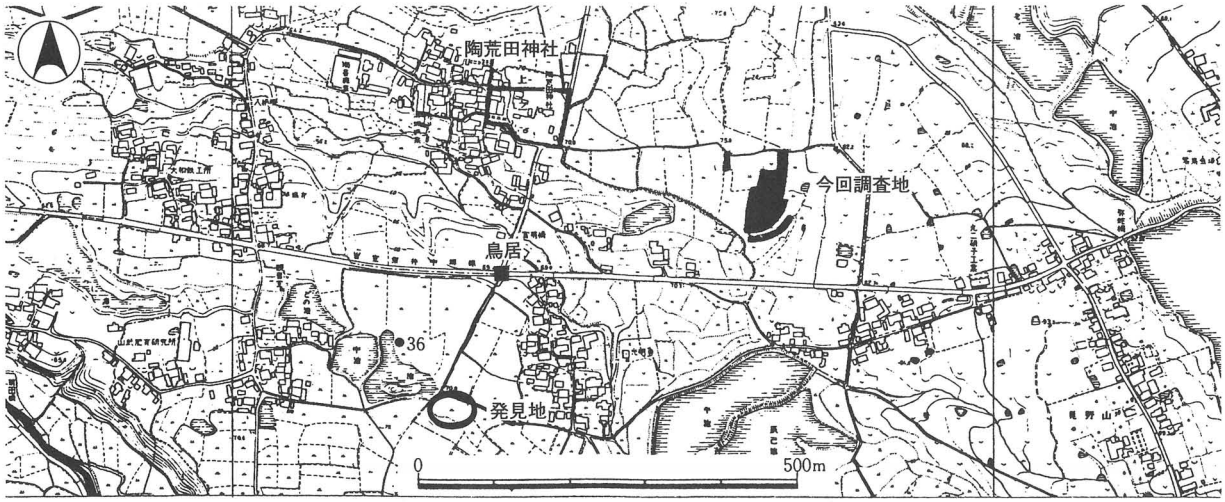


図16　須恵器群発見地（１／10000）

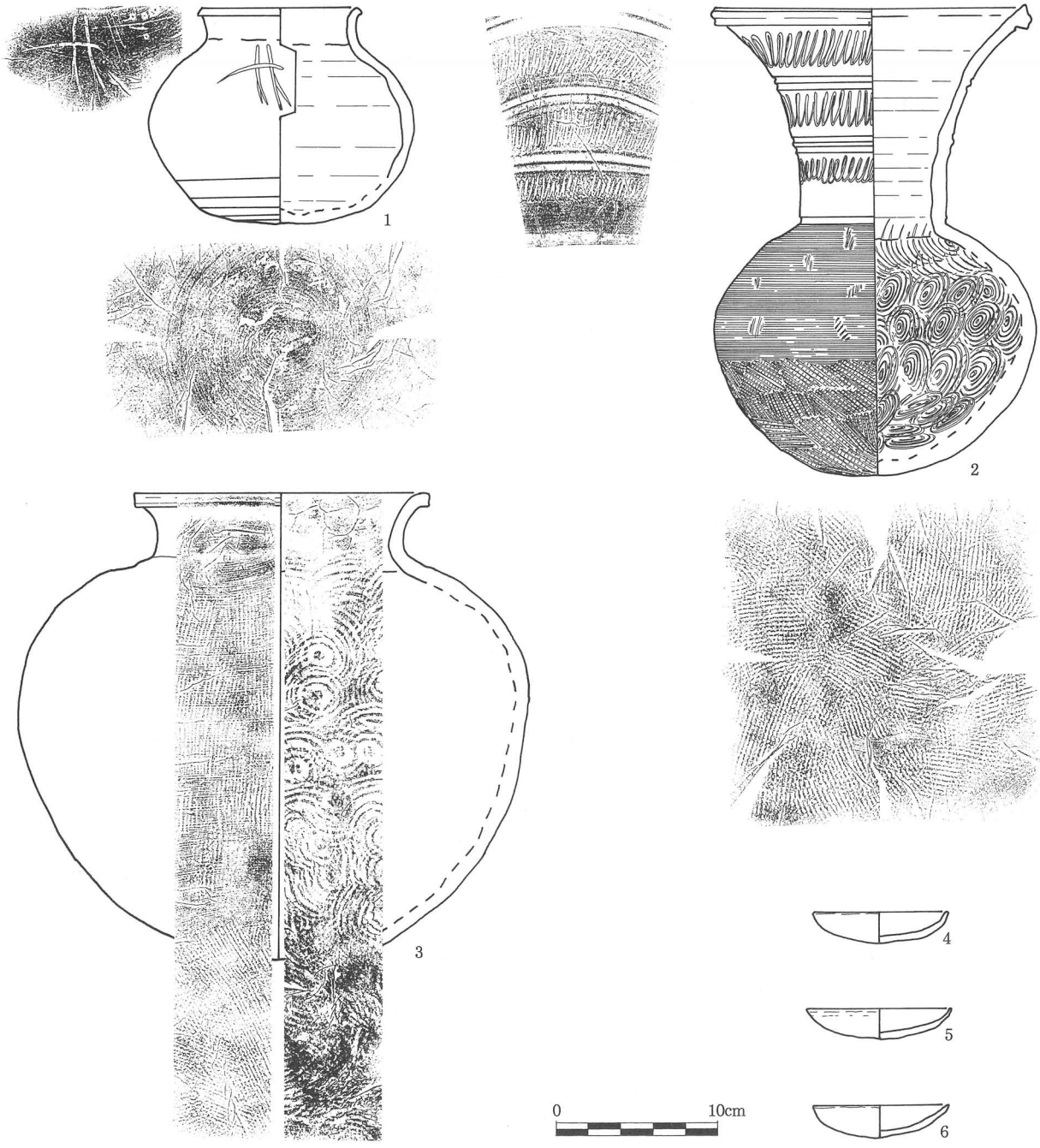


図17　明治四十二年発見の須恵器群他（１／４）

本編掲載実測遺物登録対照表（陶器南概要Ⅷ）

実測番号	出土地区	器種・時期	挿図番号	図版番号
1	1a区	坏身・飛鳥	10-13	8g
2	1b区	坏身・飛鳥		9a-11
3	1a区	坏身・飛鳥	10-11	9a-14
4	1a区	坏身・飛鳥	10-6	
5	4区	坏身・飛鳥	10-14	9a-13
6	1b区	坏身・飛鳥	10-16	9a-17
7	4区	坏身・飛鳥	10-15	9a-12
8	1b区	坏身・飛鳥	10-12	
9	1b区	坏身・飛鳥	10-18	9a-16
10	1b区	坏身・飛鳥	10-17	9a-15
11	3区	坏蓋・飛鳥	10-23	
12	1a区	坏身・飛鳥	10-22	
13	1a区	坏身・飛鳥	10-21	9a-13
14	4区	坏蓋・飛鳥？	10-25	9a-1
15	1a区	坏蓋・飛鳥	10-4	8g
16	1b区	坏蓋・飛鳥	10-3	9a-8
17	4区	坏蓋・飛鳥	10-7	9a-7
18	1a区	坏蓋・飛鳥	10-9	9a-3
19	1b区	坏蓋・飛鳥	10-8	
20	1a区	坏蓋・飛鳥	10-2	9a-20
21	1a区	坏蓋・飛鳥	10-20	
22	1a区	坏蓋・飛鳥	10-19	
23	1b区	坏蓋・飛鳥	10-10	9a-10
24	9区	鉄斧・？		
25	9区	石ヒ・縄紋晩	4-6	8c
26	1a区	坏蓋・飛鳥	10-1	9a-26
27	5区	磚・飛鳥？	10-39	9b-9
28	4区	甕・飛鳥	10-32	9b-7
29	4区	甕・飛鳥	10-31	9b-4
30	3区	坏蓋・飛鳥	10-5	9a-9
31	3区	壷・飛鳥	10-34	9b-6
32	1b区	壷・飛鳥	10-33	9b-3
33	1a区	器台・飛鳥	10-37	9b-1
34	5区	甕・飛鳥	10-29	9b-5
35	4区	甕・飛鳥	10-30	9b-2
36	5区	壷・飛鳥	10-38	
37	4区	壷・飛鳥	10-36	
38	2区	高坏・飛鳥	10-26	
39	1a区	高坏・飛鳥	10-27	
40	7区	高坏・飛鳥	10-28	9b-8
41	2区	壷・飛鳥	10-35	
42	馬池表採	ナイフ形石器・旧石器	4-1	8a
43	6区	石鏃・縄紋	4-3	8b
44	8区 溝8-1	瓦器碗・室町	13-10	
45	8区 溝8-1	瓦器碗・室町	13-3	
46	7区 溝7-1	瓦器碗・室町	13-2	9d-4
47	7区 溝7-4	瓦器碗・室町	13-4	
48	8区 溝8-1	瓦器碗・室町	13-1	9d-2
49	6区	瓦器碗・室町	13-9	
50	8区 溝8-1	土師器碗・室町	13-8	

実測番号	出土地区等	器種・時期	挿図番号	図版番号
51	7区 溝7-4	スリ鉢・室町	13-15	
52	7区 溝7-4	スリ鉢・室町	13-14	
53	7区 溝7-1	スリ鉢・室町	13-16	9d-11
54	8区 溝8-3	スリ鉢・室町	13-12	9d-5
55	7区 溝7-4	スリ鉢・室町	13-14	9d-6
56	7区 溝7-4	スリ鉢・室町	13-13	9d-7
57	7区 溝7-1	壷・室町	13-17	9d-10
58	5区	坏蓋・飛鳥	10-24	9a-2
59	試1区	瓦器碗・鎌倉	15-10	9d-3
60	試1区	瓦器皿・鎌倉	15-9	9d-1
61	8区 溝8-1	羽釜・室町	13-22	
62	7区 溝7-4	羽釜・室町	13-20	
63	7区 溝7-1	羽釜・室町	13-19	
64	7区 溝7-1	羽釜・室町	13-18	
65	6区 土坑6-1	青磁碗・鎌倉	13-11	9d-8·9
66	7区 溝7-4	羽釜・室町	13-23	
67	試1区	スリ鉢・鎌倉	15-11	
68	9区 土坑9-1	羽釜・室町	13-21	
69	試1区	羽釜・鎌倉	15-12	
70	6区 土坑6-1	瓦器碗・室町	13-6	8h
71	6区 土坑6-1	瓦器碗・室町	13-5	8i
72	MT19南表採	スリ鉢・？	15-13	
73	6区 土坑6-1	瓦器碗・室町	13-7	
74	MT19表採	坏蓋・古墳後	15-1	8c
75	試1区 落ちこみ	坏身・古墳後	15-2	
76	試1区 落ちこみ	碗・古墳後	15-4	
77	試1区 落ちこみ	台付鉢・古墳後	15-7	
78	試1区 落ちこみ	鉢・古墳後	15-6	
79	試1区 落ちこみ	甕・古墳後	15-8	
80	試1区 落ちこみ	坏身・古墳後	15-5	8f
81	試1区 落ちこみ	坏身・古墳後	15-3	
82	個人蔵	壷・古墳後	17-1	10b
83	個人蔵	壷・古墳後	17-2	10c
84	個人蔵	甕・古墳後	17-3	10a
85	個人蔵	土師皿・？	17-4	10d
86	個人蔵	土師皿・？	17-5	10d
87	個人蔵	土師皿・？	17-6	10d
88	7区	羽釜・室町		9c-1
89	8区 溝8-1	羽釜・室町		9c-2
90	8区 溝8-1	羽釜・室町		9c-3
91	8区 溝8-1	羽釜・室町		9c-4
92	8区 溝8-1	羽釜・室町		9c-5
93	8区 溝8-1	甕・室町		9c-6
94	7区 溝7-1	甕・室町		9c-7

『陶器南遺跡発掘調査概要』Ⅱ掲載実測遺物登録対照表（1）

挿図番号	図版番号	器種・時期	実測番号	出土地区
例言　下	－	石包丁・弥生前	6-61・76	2
8-1	14-17	石製紡錘車・古墳後	6-63	2
2	14-18	石製紡錘車・古墳後	6-64	2
3		焼き台・古墳後	6-75	2
4		焼き台・古墳後	6-74	2
5		焼き台・古墳後	6-72	2
6		焼き台・古墳後	6-73	2
11-1		坏蓋・古墳後	6-32	3
2		坏蓋・古墳後	6-34	3
3		坏蓋・古墳後	6-33	3
4		坏蓋・古墳後	6-35	3
5		坏身・古墳後	6-40	3
6		坏身・古墳後	6-44	3
7		坏身・古墳後	6-42	3
8		坏身・古墳後	6-41	3
9		坏身・古墳後	6-43	3
10		坏身・古墳後	6-38	3
11		坏身・古墳後	6-39	3
12	14-10	坏身・古墳後	6-37	3
13		高坏・古墳後	6-47	3
14		小壷・奈良前	6-36	3
15		ハソウ・古墳後	6-48	3
16		壷・古墳後	6-49	3
17		スリ鉢・奈良前	6-45	3
18		瓦器碗・鎌倉	6-46	3
19		坏蓋・古墳後	6-12	5
20		坏蓋・古墳後	6-14	5
21		坏身・古墳後	6-1	4a
22		坏身・古墳後	6-21	5
23		坏身・古墳後	6-20	5
24		坏身・古墳後	6-23	5
25		坏身・古墳後	6-22	5
26		坏身・古墳後	6-2	4a
27		坏蓋・古墳後	6-15	5
28		高坏・古墳後	6-19	5
29		壷・古墳後	6-17	5
30		小壷・古墳後	6-5	4b
31		甕・古墳後	6-18	5
32		甕・古墳後	6-9	4a
33		坏身・奈良前	6-24	5
34		坏身・奈良前	6-3	4a
35		坏身・奈良前	6-25	5
36		坏身・奈良前	6-26	5
37		坏身・奈良前	6-4	4a
38	14-14	タコ壷・奈良前	6-16	5
15-1		瓦器碗・鎌倉	6-27	6
2		瓦器碗・鎌倉	6-31	6
3		瓦器碗・鎌倉	6-30	6
4		瓦器碗・鎌倉	6-28	6
5		瓦器碗・鎌倉	6-29	6
15-6		瓦器碗・鎌倉	6-52	6
7		瓦器碗・鎌倉	6-6	4a
8		瓦器碗・鎌倉	6-54	6
9		瓦器碗・鎌倉	6-56	6
10		瓦器碗・鎌倉	6-55	6
11		瓦器碗・鎌倉	6-58	6
12		瓦器碗・鎌倉	6-57	6
13	14-13	瓦器碗・鎌倉	6-51	6
14		青磁碗・鎌倉	6-65	試1
15		青磁碗・鎌倉	6-69	6
16		青磁碗・鎌倉	6-70	6
17		青磁碗・鎌倉	6-64	6
18		青磁碗・鎌倉	6-68	6
19		白磁碗・鎌倉	6-66	6
20		白磁碗・鎌倉	6-67	6
21		瓦質スリ鉢・鎌倉	6-7	4a
22		丸瓦・鎌倉	6-11	6
23		丸瓦・鎌倉	6-10	6
24		羽釜・鎌倉	6-59	6
25		羽釜・鎌倉	6-60	6
	14-16	石鏃・縄紋晩	6-62	2
表紙		壷・奈良前	6-431	1

（P29から続き）

挿図番号	図版番号	実測番号	採集地点	器種・時期
28-33		5-220	MT309	坏蓋・古墳後
34		5-229	MT309	坏身・古墳後
35		5-228	MT309	坏身・古墳後
36		5-225	MT309	高坏・古墳後
37		5-226・227	MT309	甕・古墳後

『陶器南遺跡発掘調査概要』Ⅱ掲載実測遺物登録対照表（２）

挿図番号	図版番号	実測番号	採集地点	器種・時期	挿図番号	図版番号	実測番号	採集地点	器種・時期
21-1		5-97	MT300	坏蓋・古墳後	22-3		5-190	MT34	坏蓋・古墳後
2		5-94	MT300	坏蓋・古墳後	4		5-191	MT34	坏蓋・古墳後
3		5-132	MT300	坏蓋・古墳後	5		5-155	MT34	坏身・古墳後
4		5-134	MT300	坏蓋・古墳後	6		5-92	MT34	坏身・古墳後
5		5-146	MT300	坏蓋・古墳後	7		5-164	MT34	坏身・古墳後
6		5-128	MT300	坏蓋・古墳後	8		5-161	MT34	坏身・古墳後
7		5-141	MT300	坏蓋・古墳後	9		5-192	MT34	坏身・古墳後
8		5-140	MT300	坏蓋・古墳後	10		5-171	MT34	壷蓋・古墳後
9		5-143	MT300	坏蓋・古墳後	11		5-91	MT34	坏身・古墳後
10		5-149	MT300	坏蓋・古墳後	12		5-181	MT34	台付壷・古墳後
11		5-96	MT300	坏蓋・古墳後	13		5-180	MT34	小壷・古墳後
12		5-129	MT300	坏蓋・古墳後	14		5-177	MT34	小壷・古墳後
13		5-133	MT300	坏蓋・古墳後	15		5-189	MT34	甕・古墳後
14		5-137	MT300	坏蓋・古墳後	16		5-169	MT34	サゲベイ・古墳後
15		5-98	MT300	坏蓋・古墳後	17		5-187	MT34	器台・古墳後
16		5-135	MT300	坏蓋・古墳後	18		5-188	MT34	ハソウ・古墳後
17		5-159	MT300	坏身・古墳後	19		5-184	MT34	ハソウ・古墳後
18		5-162	MT300	坏身・古墳後	20		5-110	MT34	器台・古墳後
19		5-160	MT300	坏身・古墳後	21		5-109	MT34	器台・古墳後
20		5-154	MT300	坏身・古墳後	22		5-120	MT301	坏蓋・飛鳥
21		5-131	MT300	坏身・古墳後	23		5-123	MT301	坏蓋・飛鳥
22		5-165	MT300	坏身・古墳後	24		5-122	MT301	坏蓋・飛鳥
23		5-163	MT300	坏身・古墳後	25		5-124	MT301	小壷・飛鳥
24		5-155	MT300	坏身・古墳後	26		5-115	MT301	坏身・飛鳥
25		5-157	MT300	坏身・古墳後	27		5-116	MT301	坏身・飛鳥
26		5-153	MT300	坏身・古墳後	28		5-118	MT301	坏身・飛鳥
27		5-156	MT300	坏身・古墳後	29		5-119	MT301	坏身・飛鳥
28		5-87	MT300	坏身・古墳後	30		5-112	MT301	坏身・飛鳥
29		5-166	MT300	坏身・古墳後	31		5-114	MT301	坏身・飛鳥
30		5-89	MT300	坏身・古墳後	32		5-193	MT301	坏身・飛鳥
31		5-90	MT300	坏身・古墳後	33		5-113	MT301	坏身・飛鳥
32		5-130	MT300	坏身・古墳後	34		5-127	MT301	鉢・飛鳥
33		5-86	MT300	高坏・古墳後	35		5-117	MT301	坏身・飛鳥
34		5-85	MT300	高坏・古墳後	36		5-111	MT301	坏身・飛鳥
35		5-88	MT300	高坏・古墳後	24-1	14-1	5-203	MT304	坏蓋・古墳後
36		5-173	MT300	高坏・古墳後	2		5-202	MT304	坏身・古墳後
37		5-175	MT300	高坏・古墳後	3		5-204	MT304	器台・古墳後
38		5-176	MT300	高坏・古墳後	4		5-201	MT304	甕・古墳後
39		5-172	MT300	高坏・古墳後	5		5-205	MT304	甕・古墳後
40		5-174	MT300	高坏・古墳後	6	14-11	5-208	MT303	坏蓋・飛鳥
41		5-102	MT300	壷・古墳後	7	14-12	5-207	MT303	坏身・飛鳥
42		5-182	MT300	壷・古墳後	8		5-206	MT303	坏身・飛鳥
43		5-183	MT300	壷・古墳後	9		5-210	MT304	壷・奈良前
44		5-179	MT300	甕・古墳後	10		5-211	MT304	壷・奈良前
45		5-101	MT300	甕・古墳後	11		5-213	MT303	高坏・飛鳥
46		5-125	MT300	甕・古墳後	12		5-209	MT303	高坏・飛鳥
47		5-185	MT300	甕・古墳後	13		5-212	MT303	壷・飛鳥
48		5-178	MT300	甕・古墳後	14		5-215	MT304	坏身・奈良前
22-1		5-93	MT34	坏蓋・古墳後	15		5-214	MT304	坏身・奈良前
2		5-138	MT34	坏蓋・古墳後	16		5-216	MT304	鉢・奈良前

『陶器南遺跡発掘調査概要』Ⅱ掲載実測遺物登録対照表（3）

挿図番号	図版番号	実測番号	採集地点	器種・時期	挿図番号	図版番号	実測番号	採集地点	器種・時期
26-1		5-230	MT305	坏蓋・古墳後	27-27	14-8	5-51	MT18	坏身・古墳後
2		5-233	MT305	坏蓋・古墳後	28		5-54	MT18	坏身・古墳後
3		5-232	MT305	坏蓋・古墳後	29	14-9	5-50	MT18	坏身・古墳後
4		5-231	MT305	坏蓋・古墳後	30		5-63	MT18	坏身・古墳後
5		5-234	MT305	壷・古墳後	31		5-64	MT18	坏身・古墳後
6		5-238	MT306	坏蓋・古墳後	32		5-65	MT18	坏身・古墳後
7		5-244	MT306	坏蓋・古墳後	33		5-40	MT18	高坏・古墳後
8		5-240	MT306	坏蓋・古墳後	34		5-6	MT18	高坏・古墳後
9		5-237	MT306	坏蓋・古墳後	35		5-7	MT18	高坏・古墳後
10		5-236	MT306	坏蓋・古墳後	36		5-18	MT18	高坏・古墳後
11		5-239	MT306	坏身・古墳後	37		5-13	MT18	高坏・古墳後
12		5-242	MT306	壷蓋・古墳後	38		5-3	MT18	高坏・古墳後
13		5-241	MT306	高坏・古墳後	39		5-41	MT18	ハソウ・古墳後
14		5-245	MT306	甕・古墳後	40		5-16	MT18	ハソウ・古墳後
15		5-246	MT306	甕・古墳後	41		5-14	MT18	ハソウ・古墳後
16		5-235	MT306	甕・古墳後	42	14-15	5-1	MT18	壷・古墳後
17		5-4	MT18	甕・古墳後	43		5-73	MT18	壷・古墳後
18		5-20	MT18	甕・古墳後	44		5-39	MT18	壷・古墳後
19		5-5	MT18	甕・古墳後	28-1		5-258	MT307	坏蓋・飛鳥
20		5-10	MT18	甕・古墳後	2		5-257	MT307	坏蓋・飛鳥
21		5-12	MT18	甕・古墳後	3		5-256	MT307	坏蓋・飛鳥
22		5-15	MT18	甕・古墳後	4		5-255	MT307	坏蓋・飛鳥
23		5-9	MT18	甕・古墳後	5		5-251	MT307	坏身・飛鳥
24		5-19	MT18	甕・古墳後	6		5-250	MT307	坏身・飛鳥
27-1		5-47	MT18	坏蓋・古墳後	7		5-249	MT307	坏身・飛鳥
2		5-49	MT18	坏蓋・古墳後	8		5-252	MT307	坏身・飛鳥
3		5-29	MT18	坏蓋・古墳後	9		5-263	MT307	坏身・飛鳥
4		5-32	MT18	坏蓋・古墳後	10		5-259	MT307	高坏・飛鳥
5		5-44	MT18	坏蓋・古墳後	11		5-253	MT307	高坏・飛鳥
6		5-42	MT18	坏蓋・古墳後	12		5-254	MT307	高坏・飛鳥
7	14-5	5-22	MT18	坏蓋・古墳後	13		5-262	MT307	壷・飛鳥
8		5-37	MT18	坏蓋・古墳後	14		5-261	MT307	壷・飛鳥
9		5-27	MT18	坏蓋・古墳後	15		5-260	MT307	壷・飛鳥
10		5-28	MT18	坏蓋・古墳後	16		5-248	MT307	陶棺身・飛鳥
11	14-3	5-25	MT18	坏蓋・古墳後	17		5-247	MT307	陶棺身・飛鳥
12		5-26	MT18	坏蓋・古墳後	18		5-78	MT308	坏蓋・古墳後
13		5-30	MT18	坏蓋・古墳後	19		5-79	MT308	坏蓋・古墳後
14	14-1	5-21	MT18	坏蓋・古墳後	20		5-77	MT308	坏蓋・古墳後
15		5-45	MT18	坏蓋・古墳後	21		5-76	MT308	坏蓋・古墳後
16	14-6	5-24	MT18	坏蓋・古墳後	22		5-75	MT308	坏身・古墳後
17		5-68	MT18	坏身・古墳後	23		5-83	MT308	高坏・古墳後
18		5-69	MT18	坏身・古墳後	24		5-74	MT308	高坏・古墳後
19		5-62	MT18	坏身・古墳後	25		5-82	MT308	高坏・古墳後
20	14-7	5-52	MT18	坏身・古墳後	26		5-71	MT308	高坏・古墳後
21		5-59	MT18	坏身・古墳後	27		5-80	MT308	高坏・古墳後
22		5-56	MT18	坏身・古墳後	28		5-81	MT308	ハソウ・古墳後
23		5-66	MT18	坏身・古墳後	29		5-84	MT308	ハソウ・古墳後
24		5-60	MT18	坏身・古墳後	30		5-223	MT309	坏蓋・古墳後
25		5-53	MT18	坏身・古墳後	31		5-224	MT309	坏蓋・古墳後
26		5-57	MT18	坏身・古墳後	32		5-221	MT309	坏蓋・古墳後

『陶器南遺跡発掘調査概要』Ⅲ掲載実測遺物登録対照表（1）

挿図番号	図版番号	実測番号	器種	出土地区	挿図番号	図版番号	実測番号	器種	出土地区
37-1	16-4	6-287	壷蓋	2	37-51	16-4	6-192	坏蓋	2
2	16-4	6-286	壷蓋	2	52(l)	16-4	6-144	坏蓋	2
3	16-4	255	壷蓋	2	53	16-4	207	坏蓋	2
4	16-4	91	壷蓋	2	54	16-4	234	坏蓋	2
5	16-4	252	壷蓋	2	55	16-4	209	坏蓋	2
6	16-4	278	壷蓋	2	56	16-4	176	坏蓋	2
7	16-4	276	壷蓋	2	57	16-4	224	坏蓋	2
8	16-4	290	壷蓋	2	58	16-4	232	坏蓋	2
9	16-4	275	壷蓋	2	59	16-4	225	坏蓋	2
10	16-4	89	壷蓋	2	60	16-4	210	坏蓋	2
11	16-2-a	293	壷蓋	2	61(g)	16-4	138	坏蓋	2
12	16-4	90	壷蓋	2	62(e)	16-4	140	坏蓋	2
13	16-3-a	289	壷蓋	2	63(p)	16-4	186	坏蓋	2
14	16-4	274	壷蓋	2	38-1	16-4	284	坏身	2
15	16-4	277	壷蓋	2	2	16-4	113	坏身	2
16	16-4	288	壷蓋	2	3	16-4	128	坏身	2
17	16-4	260	壷蓋	2	4	16-4	121	坏身	2
18	16-4	218	壷蓋	2	5	16-4	129	坏身	2
19	16-4	261	壷蓋	2	6	16-4	132	坏身	2
20	16-4	285	坏蓋	2	7(w)	16-4	153	坏身	2
21(a)	16-4	164	坏蓋	2	8	16-4	133	坏身	2
22(c)	16-4	184	坏蓋	2	9	16-4	106	坏身	2
23	16-4	221	坏蓋	2	10	16-4	159	坏身	2
24	16-4	139	坏蓋	2	11	16-4	156	坏身	2
25	16-4	185	坏蓋	2	12	16-4	196	坏身	2
26	16-4	213	坏蓋	2	13(r)	16-4	191	坏身	2
27(x)	16-4	208	坏蓋	2	14	16-4	124	坏身	2
28(q)	16-4	197	坏蓋	2	15	16-4	100	坏身	2
29	16-4	177	坏蓋	2	16	16-4	217	坏身	2
30	16-4	175	坏蓋	2	17	16-4	216	坏身	2
31	16-4	211	坏蓋	2	18	16-4	108	坏身	2
32	16-4	212	坏蓋	2	19(s)	16-4	126	坏身	2
33	16-4	181	坏蓋	2	20	16-4	162	坏身	2
34	16-4	179	坏蓋	2	21(b)	16-4	116	坏身	2
35	16-4	226	坏蓋	2	22	16-4	120	坏身	2
36	16-4	178	坏蓋	2	23	16-4	230	坏身	2
37	16-4	180	坏蓋	2	24(i)	16-4	151	坏身	2
38	16-4	228	坏蓋	2	25	16-4	112	坏身	2
39	16-4	249	坏蓋	2	26	16-4	105	坏身	2
40	16-4	194	坏蓋	2	27	16-4	251	坏身	2
41	16-4	134	坏蓋	2	28(f)	16-4	197	坏身	2
42	16-4	142	坏蓋	2	29	16-4	101	坏身	2
43	16-4	146	坏蓋	2	30	16-4	157	坏身	2
44	16-4	206	坏蓋	2	31	16-4	117	坏身	2
45	16-4	145	坏蓋	2	32	16-4	283	坏身	2
46	16-4	135	坏蓋	2	33	16-4	154	坏身	2
47	16-4	136	坏蓋	2	34	16-4	193	坏身	2
48	16-4	317	坏蓋	2	35(u)	16-4	127	坏身	2
49	16-4	137	坏蓋	2	36	16-4	122	坏身	2
50	16-4	143	坏蓋	2	37	16-4	130	坏身	2

『陶器南遺跡発掘調査概要』Ⅲ掲載実測遺物登録対照表（2）

挿図番号	図版番号	実測番号	器種	出土地区	挿図番号	図版番号	実測番号	器種	出土地区
38-38	16-4	6-189	坏身	2	40-4	17-1-c	6-199	高坏蓋	2
39	16-4	6-200	坏身	2	5	17-1-h	6-165	低脚有蓋高坏	2
40	16-4	6-110	坏身	2	6	17-1-b	166	低脚有蓋高坏	2
41	16-4	215	坏身	2	7	17-1-f	238	低脚有蓋高坏	2
42	16-4	150	坏身	2	8	17-1-d	204	低脚有蓋高坏	2
43	16-4	131	坏身	2	9	17-1-i	188	低脚無蓋高坏	2
44	16-4	196	坏身	2	10	17-1-o	291	低脚無蓋高坏	2
45	16-4	229	坏身	2	11	17-1-m	227	低脚無蓋高坏	2
46	16-4	107	坏身	2	12	17-1-k	235	低脚無蓋高坏	2
47	16-4	155	坏身	2	13		237	低脚無蓋高坏	2
48	16-4	111	坏身	2	14		313	低脚無蓋高坏	2
49	16-4	125	坏身	2	15		312	低脚無蓋高坏	2
50	16-4	148	坏身	2	16		172	低脚無蓋高坏	2
51	16-4	123	坏身	2	17		205	低脚無蓋高坏	2
52	16-4	240	坏身	2	18		82	長脚無蓋高坏	2
53	16-4	149	坏身	2	19		152	長脚無蓋高坏	2
54	16-4	187	坏身	2	20	17-2-f	319	長脚無蓋高坏	2
55	16-4	119	坏身	2	21	17-2-g	239	長脚無蓋高坏	2
56	16-4	223	坏身	2	22	17-2-a	271	長脚無蓋高坏	2
39-1	16-4	222	坏蓋	2	23		267	長脚有蓋高坏	2
2	16-4	163	坏蓋	2	24		195	長脚有蓋高坏	2
3	16-4	198	坏蓋	2	25		83	長脚有蓋高坏	2
4	16-4	141	坏蓋	2	26	17-2-e	318	長脚無蓋高坏	2
5	16-4	92	坏蓋	2	27	17-2-c	241	長脚無蓋高坏	2
6	16-4	93	坏蓋	2	28		86	長脚無蓋高坏	2
7	16-4	96	坏蓋	2	29	17-2-d	268	長脚無蓋高坏	2
8	16-4	99	坏蓋	2	30		242	長脚有蓋高坏	2
9	16-4	158	坏身	2	31	17-2-b	257	長脚有蓋高坏	2
10	16-4	109	坏身	2	32		535	長脚有蓋高坏	2
11	16-4	160	坏身	2	33		6-256	長脚有蓋高坏	2
12	16-4	94	坏身	2	41-1	16-1-h	6-75	焼き台？	2
13	16-4	248	坏身	2	2	16-1-e	6-259	焼き台？	2
14	16-4	231	坏身	2	3	16-1-f	6-294	焼き台？	2
15	16-4	103	坏身	2	4	16-1-d	6-254	焼き台？	2
16	16-4	250	坏身	2	5	16-1-c	6-280	焼き台？	2
17	16-4	118	坏身	2	6	16-1-i	6-74	焼き台？	2
18	16-4	161	坏身	2	7	16-1-g	6-279	焼き台？	2
19	16-4	102	坏身	2	8		6-295	焼き台？	2
20	16-4	97	坏身	2	9	16-1-a	6-73	焼き台？	2
21	16-4	329	坏身	2	10	16-1-b	6-72	焼き台？	2
22	16-4	114	坏身	2	11		6-262	タコ壷	2
23		311	坏身	2	12	16- 2-k	6-281	小壷	2
24		315	坏蓋	2	13		6-81	小壷	2
25		314	坏身	2	14	16-2-d	6-201	小壷	2
26	16-4	87	坏身	2	15	16-2-f	6-115	小壷	2
27		322	陶棺？	2	16	16-2-l	6-282	小壷	2
28		263	小壷	2	17	16-2-e	6-328	小壷	2
40-1	17-1-g	220	高坏蓋	2	18	16-2-c	6-203	小壷	2
2	17-1-a	88	高坏蓋	2	19		6-173	小壷	2
3	17-1-e	183	高坏蓋	2	20	17-2-b	6-243	スリ鉢	2

『陶器南遺跡発掘調査概要』Ⅲ掲載実測遺物登録対照表（３）

挿図番号	図版番号	実測番号	器種	出土地区	挿図番号	図版番号	実測番号	器種	出土地区
41-21		6-259	ハソウ	2	43-30	20-2-b	6-448	焼き台？	1
22		6-291	ハソウ	2	31	20-2-a	6-454	獣脚硯	1
23		258	ハソウ	2	32	19-1-b	308	横瓶	1
24		330	ハソウ	2	33		530	土師器甕	1
25		246	土師器甕	2	34		529	土師器甕	1
26	16-2-b	270	台付壷	2	44-1		479	坏身（台付）	1
27	16-3-c	273	台付壷	2	2		430	坏身（台付）	1
28		355	提瓶	2	3	18-3-b	438	坏身（台付）	1
29		266	提瓶	2	4		490	坏身（台付）	1
30	17-3-a	272	提瓶	2	5		499	坏身（台付）	1
42-1		310	甕	2	6		492	坏身（台付）	1
2		264	甕	2	7		506	坏身（台付）	1
3		244	甕	2	8		437	坏身（台付）	1
4		247	甕	2	9		507	坏身（台付）	1
5		265	甕	2	10		402	坏身（台付）	1
6		245	甕	2	11		433	坏身（台付）	1
7		174	器台	2	12		421	坏身（台付）	1
8		324	器台	2	13		409	坏身（台付）	1
9	17-4-a	170	コシキ	2	14		491	坏身（台付）	1
10		84	コシキ	2	15		418	坏身（台付）	1
11		85	コシキ	2	16		494	坏身（台付）	1
43-1		424	坏蓋	1	17		500	坏身（台付）	1
2		463	坏蓋	1	18	18-3-c	408	坏身（台付）	1
3		470	坏蓋	1	19	18-3-a	420	坏身（台付）	1
4		464	坏蓋	1	20		533	坏身（台付）	1
5		473	坏蓋	1	21	18-3-d	419	坏身（台付）	1
6		443	坏蓋	1	22		493	坏身（台付）	1
7		445	坏蓋	1	23		401	浅鉢	1
8		461	坏蓋	1	24	18-4-c	495	浅鉢	1
9		465	坏蓋	1	25	21-2	467	浅鉢	1
10		441	坏蓋	1	26	21-1-b	436	高坏	1
11	21-1-a	462	坏蓋	1	27	19-1-a	449	平瓶	1
12		442	坏蓋	1	28	20-3-b	457	鉢	1
13		466	坏蓋	1	29		307	鉢	1
14		439	坏蓋	1	30		306	鉢	1
15		444	坏蓋	1	31		485	Ⅲ	1
16		447	坏蓋	1	32	21-3	451	Ⅲ	1
17	20-1-f	423	坏蓋	1	45-1	18-1-a	519	坏身（台無）	1
18		415	坏蓋	1	2	18-1-b	429	坏身（台無）	1
19		440	坏蓋	1	3		515	坏身（台無）	1
20		446	坏蓋	1	4		513	坏身（台無）	1
21		471	坏蓋	1	5		481	坏身（台無）	1
22		472	坏蓋	1	6	18-1-d	520	坏身（台無）	1
23		475	坏蓋	1	7	18-2-a	510	坏身（台無）	1
24		487	坏蓋	1	8		484	坏身（台無）	1
25		497	坏蓋	1	9		517	坏身（台無）	1
26		496	坏蓋	1	10	18-2-c	501	坏身（台無）	1
27		486	坏蓋	1	11	18-2-b	505	坏身（台無）	1
28		534	坏蓋	1	12	18-1-e	488	坏身（台無）	1
29		498	承盤	1	13		428	坏身（台無）	1

『陶器南遺跡発掘調査概要』Ⅲ掲載実測遺物登録対照表（４）

挿図番号	図版番号	実測番号	器種	出土地区
45-14		6-482	坏身（台無）	1
15		6-416	坏身（台無）	1
16		411	坏身（台無）	1
17		407	坏身（台無）	1
18	18-1-f	509	坏身（台無）	1
19		516	坏身（台無）	1
20		483	坏身（台無）	1
21		489	坏身（台無）	1
22		512	坏身（台無）	1
23		504	坏身（台無）	1
24		410	坏身（台無）	1
25	18-1-c	417	坏身（台無）	1
26	18-1-g	511	坏身（台無）	1
27	18-4-a	412	坏身（台無）	1
28	18-4-b	531	坏身（台無）	1
29	18-4-d	459	坏身（台無）	1
30		514	坏身（台無）	1
31	20-4-a	435	スリ鉢	1
32	20-4-b	469	スリ鉢	1
33		301	盤	1
34		300	盤	1
35	21-4	528	盤	1
46-1		474	壷蓋	1
2	20-1-d	414	壷蓋	1
3	20-1-a	413	壷蓋	1
4	20-1-e	432	小壷	1
5	20-1-c	426	小壷	1
6	20-1-b	480	小壷	1
7	19-2-a	450	長頸壷	1
8	20-3-a	460	鍋	1
9	19-2-b	434	無頸壷	1
10	19-3-a	304	台付長頸壷	1
11		532	台付長頸壷	1
12	19-3-c	452	台付長頸壷	1
13		455	台付長頸壷	1
14		427	壷蓋	1
15		302	短頸壷	1
16	19-3-b	468	台付長頸壷	1
17	18-5	431	長胴壷	1
47-1		305	甕	1
2		521	甕	1
3		522	甕	1
4	19-4	456	甕	1
5		524	甕	1
6		525	甕	1
7		526	甕	1
8		523	甕	1

陶器南遺跡関係文献

大阪府教育委員会　『陶器南遺跡発掘調査概要』　1995
大阪府教育委員会　『陶器南遺跡発掘調査概要』Ⅱ　1996
大阪府教育委員会　『陶器南遺跡発掘調査概要』Ⅲ　1997
大阪府教育委員会　『陶器南遺跡発掘調査概要』Ⅳ　1998
大阪府教育委員会　『陶器南遺跡発掘調査概要』Ⅴ　1999
大阪府教育委員会　『陶器南遺跡発掘調査概要』Ⅵ　1999
大阪府教育委員会　『陶器南遺跡発掘調査概要』Ⅶ　2000
大阪府教育委員会　『陶器千塚発掘調査概要』　1992
大阪府教育委員会　『陶器千塚発掘調査概要』Ⅱ　1993
大阪府教育委員会　『陶器千塚発掘調査概要』Ⅲ　1994
堺市教育委員会　『陶器千塚29号墳発掘調査概要報告書』　1984
堺市教育委員会　『辻之遺跡現地説明会要旨』　1982
堺市教育委員会　『田園遺跡発掘調査中間報告』　1982
堺市教育委員会　『田園』Ⅱ　堺市文化財調査報告第19集　1984
堺市教育委員会　『陶器・小角田遺跡』（ＫＯＫ001）　堺市文化財調査報告第33集　1988
堺市教育委員会　『小角田遺跡』（ＫＯＫ002）　堺市文化財調査報告第38集　1988
堺市教育委員会　『陶器・小角田遺跡』（ＫＯＫ003～５）　堺市文化財調査概報報告第11冊　1991
堺市教育委員会　『陶器・小角田遺跡』（ＫＯＫ006）　堺市文化財調査概報報告第32冊　1992
堺市教育委員会　『小角田遺跡発掘調査概要報告』（ＫＯＫ008）　堺市文化財調査概報報告第52冊　1995
富岡謙蔵　『古鏡の研究』　1920　丸善株式会社
後藤守一　『漢式鏡』　1925　雄山閣
梅原末治　『銅鐸の研究』　1927　木耳社
森　浩一　『陶器千塚見学ノート』　1950
服部翰明　「陶邑古墳時代集落の動向」『大阪文化財論集』　1989　（財）大阪文化財センター
西川寿勝　「古墳時代の物流」『大阪府担当者研究会資料集』　35　1997
山田隆一　「中世の堺市陶器南遺跡とその周辺」『大阪府担当者研究会資料集』38　1999
海邉博史　「堺市土山窯跡の検討」『関西大学博物館紀要』５　1999　関西大学博物館
樋口吉文　「茅渟県陶邑の最新の考古学成果から」『堺市博物館報』18　2000　堺市立博物館
西川寿勝　「古墳時代の泉北のまち」『大阪春秋』96　2000　大阪春秋社

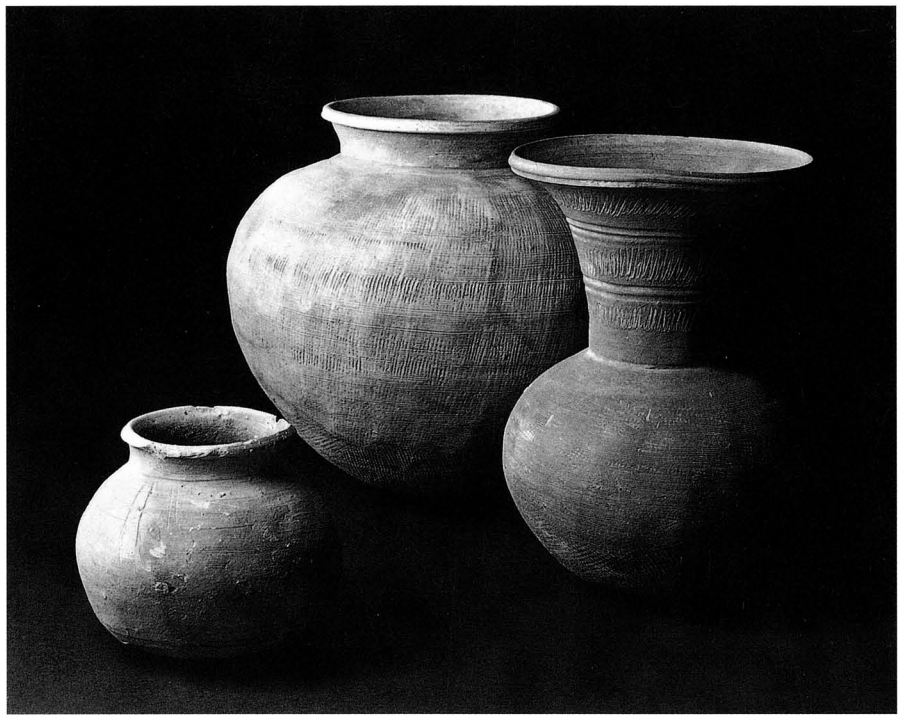
報　告　書　抄　録

ふりがな	とうきみなみいせきはっくつちょうさがいよう・Ⅷ
書名	陶器南遺跡発掘調査概要・Ⅷ
副書名	
巻次数	Ⅷ
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集著者名	西川寿勝
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	(〒)540－8571　大阪府大阪市中央区大手前２丁目　☎06－6941－0351(代表)
発行年月日	2001年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
とうきみなみいせき 陶器南遺跡	おおさかふさかいし 大阪府堺市 とうききた 陶器北	27201	336	34° 30′ 40″	135° 31′ 40″	00年６月から 01年３月末まで	合計 3263㎡	府営ほ場整備事業陶器北地区に伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
とうきみなみいせき 陶器南遺跡	集落	古墳時代後期	落ち込み状遺構	須恵器	陶邑で生産された須恵器の物流拠点
		飛鳥時代	掘立柱建物	須恵器・土師器	
		鎌倉時代	土坑	瓦器	
		室町時代	掘立柱建物 土坑群 区画溝	瓦器・陶磁器・瓦	

図　　版



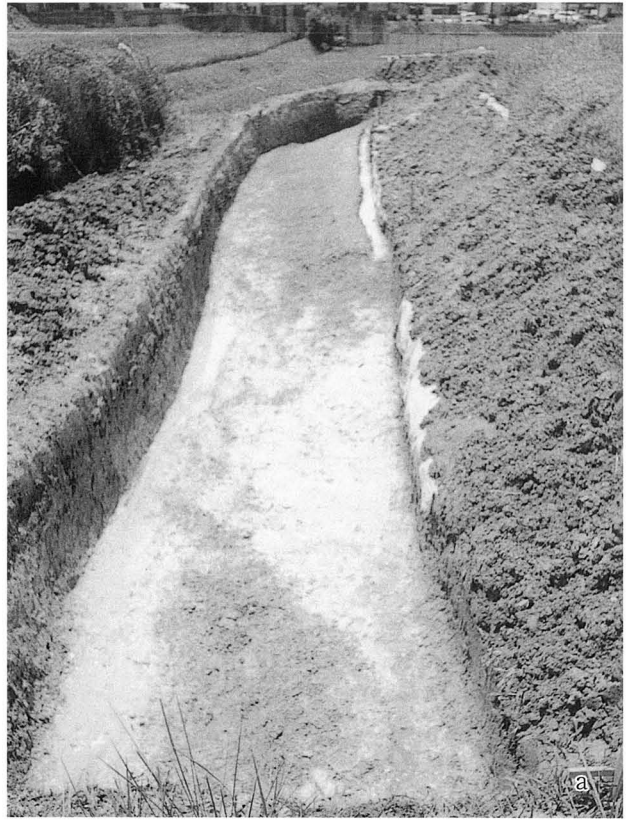
明治42年発見土器

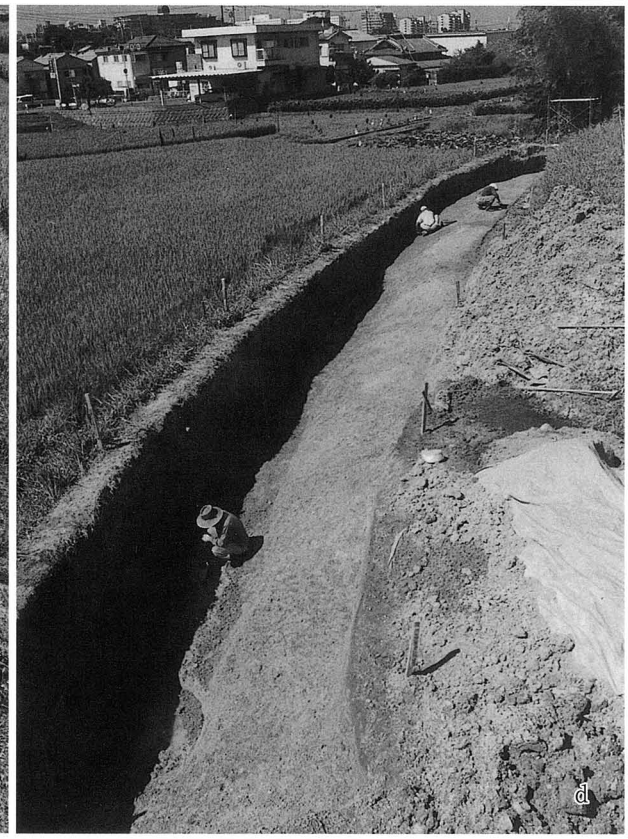
図版 1

a．西から

b．東から

c．南から
（H11.10.25撮影）





a．１ａ区全景（北から）
b．１ａ区全景（南から）
c．１ｂ区全景（西から）
d．１ｂ区全景（東から）
e．２区全景（西から）

a．２区全景（北から）

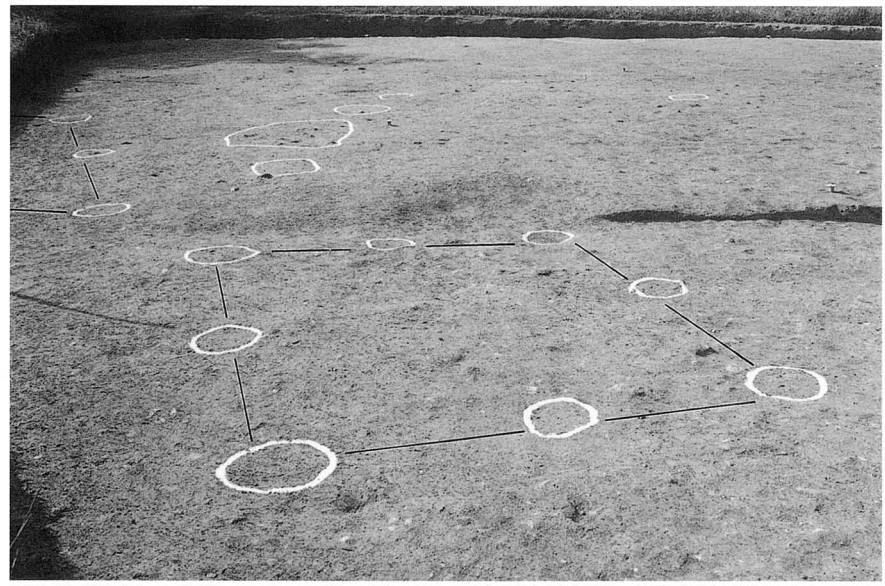
b．同上

c．同上

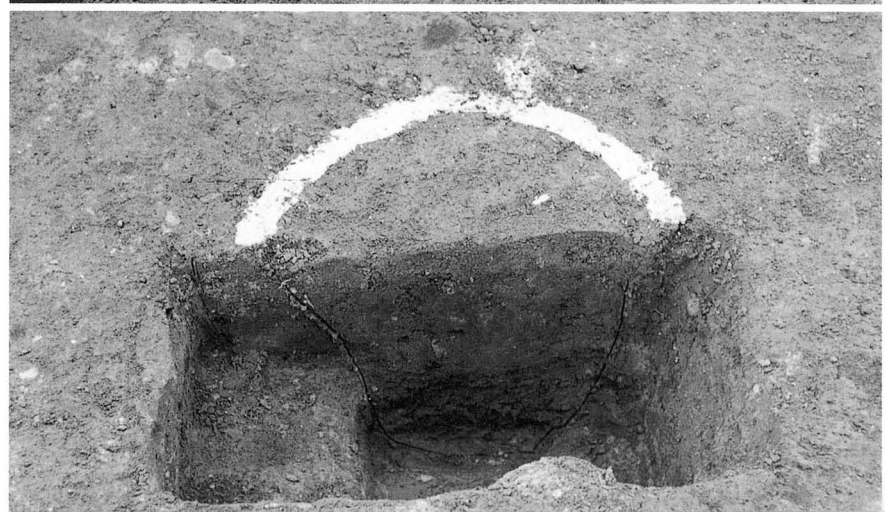
d．同上

a．２区全景（西から）

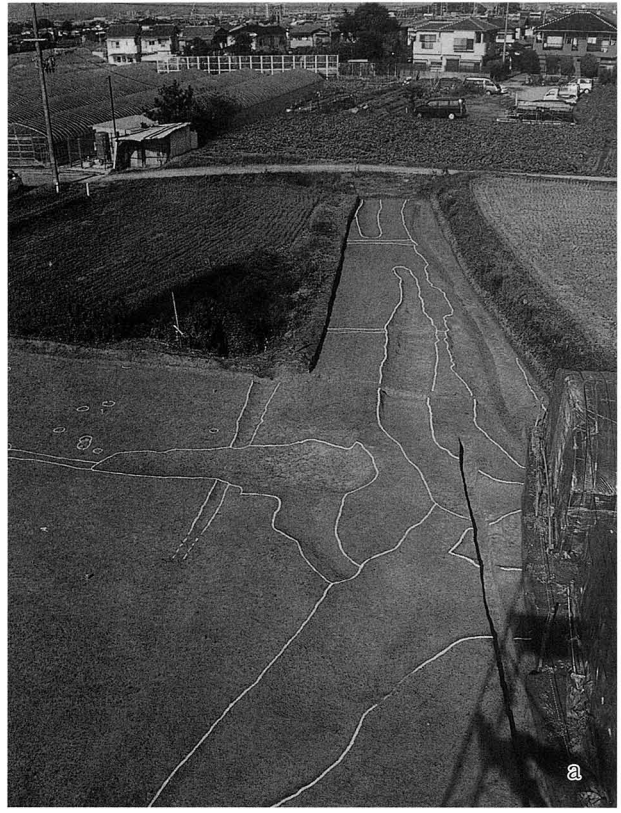
b．２区掘立柱建物２－２

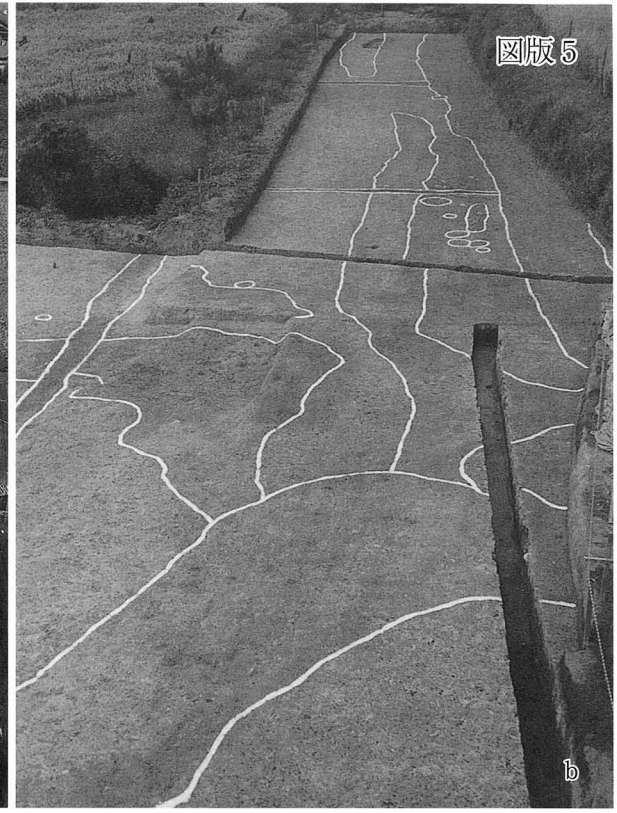


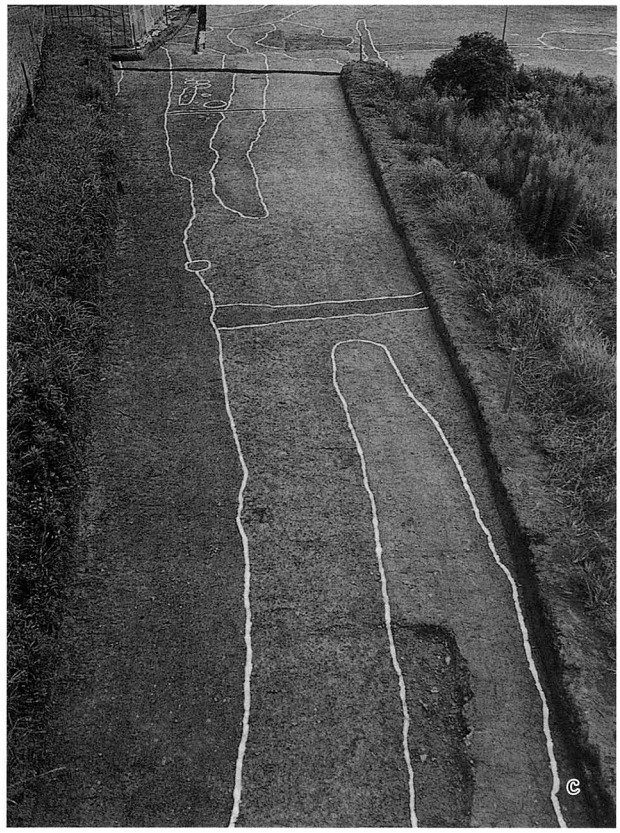
c．２区掘立柱建物２－１



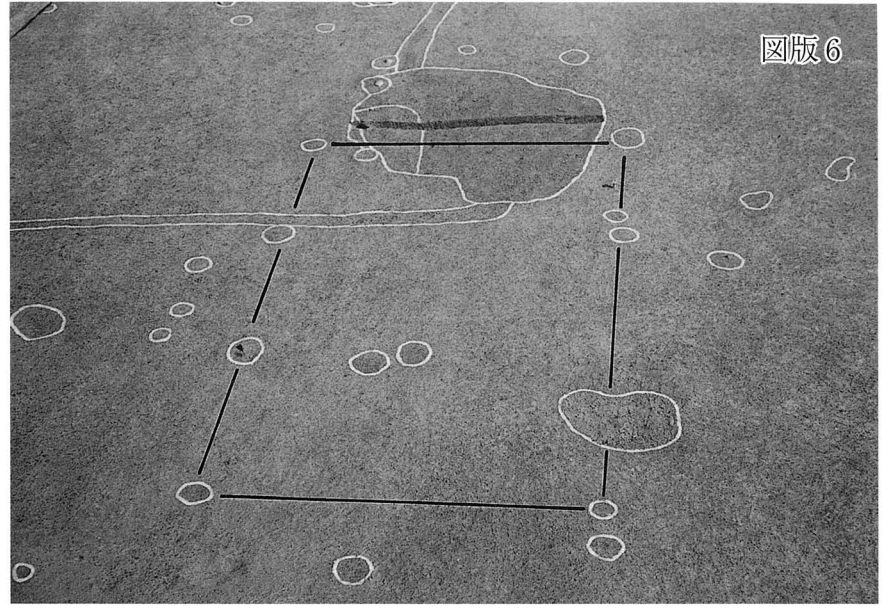
d．掘立柱建物２－１柱穴断面



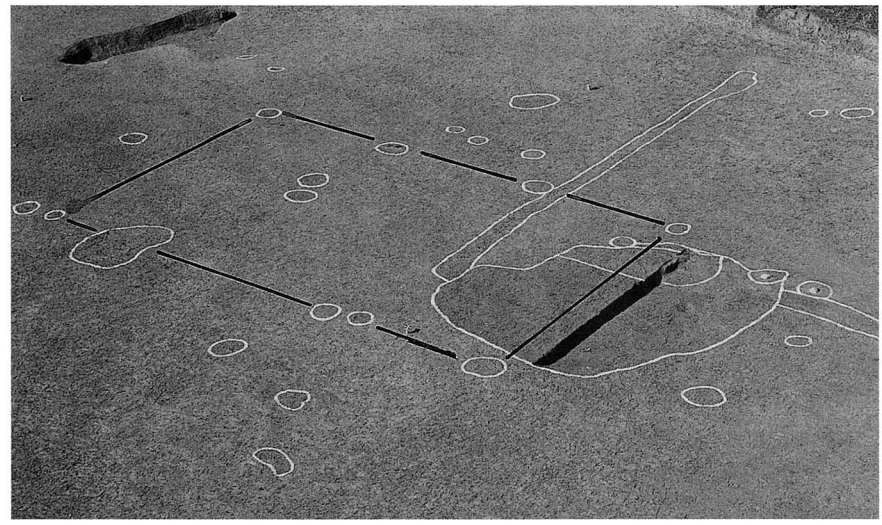




ａ．７・８区検出状況（南から）
ｂ．同上完掘状況（南から）
ｃ．８区全景（北から）
ｄ．６区全景（西から）
ｅ．６区掘立柱建物６－１
（西から）



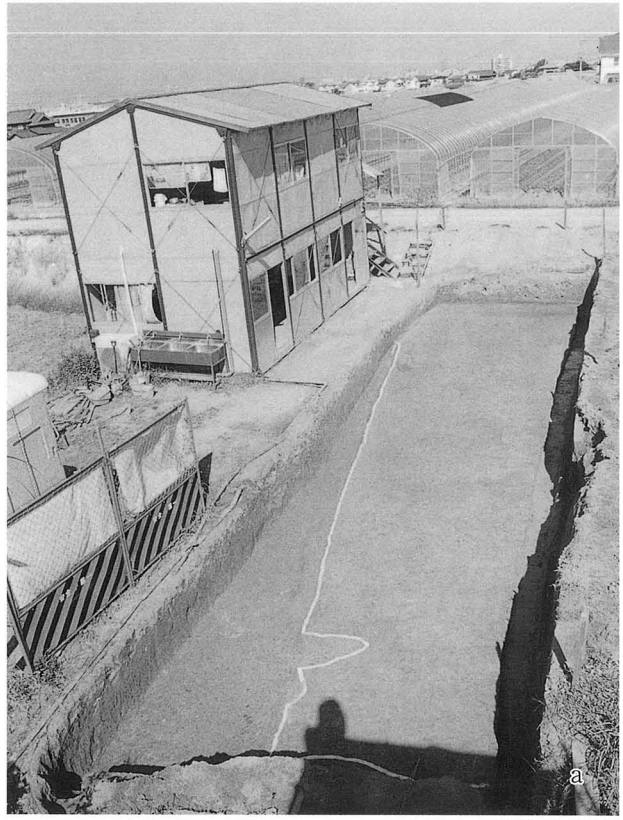
a．6区掘立柱建物6－1（西から）

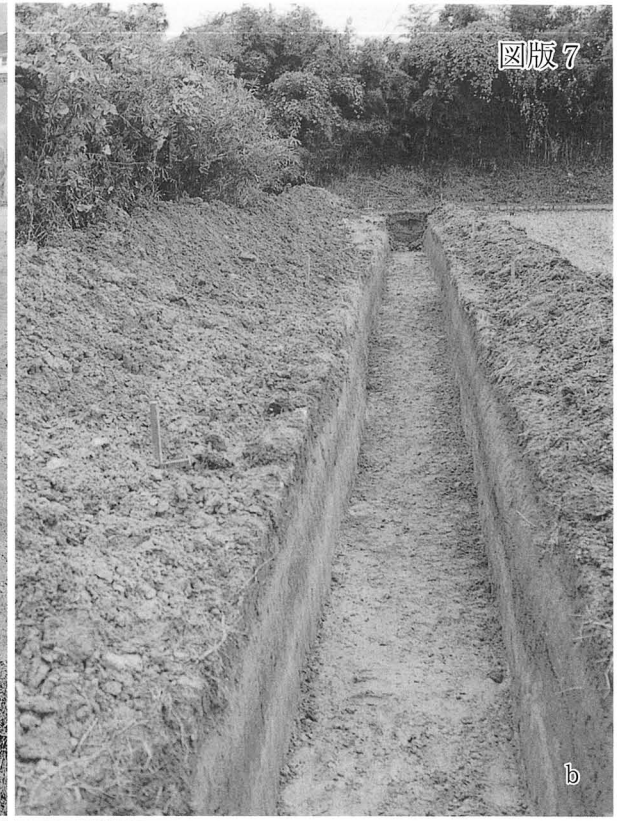


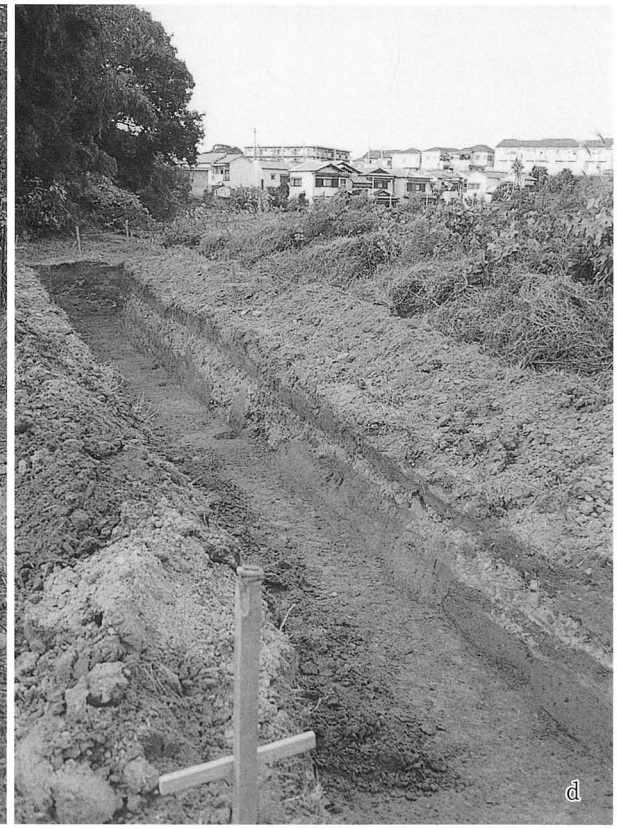
b．同上（南から）

c．6区土坑6－1（北から）

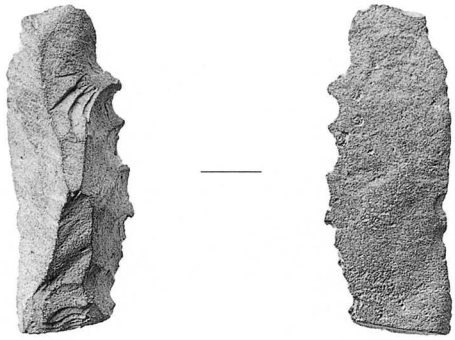
d．6区掘立柱建物6－1柱穴断面



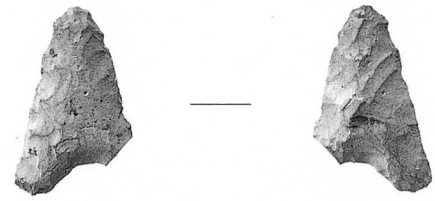




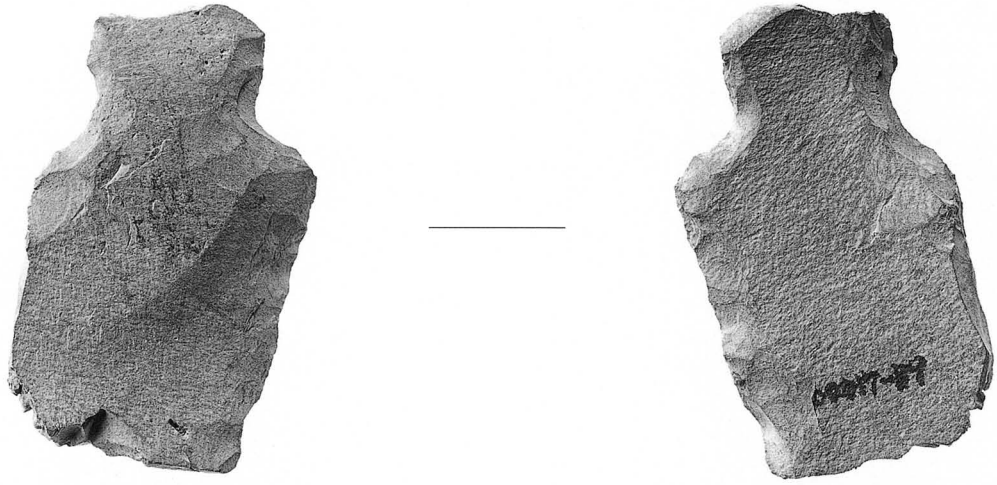
ａ．９区全景（南から）
ｂ．試１区全景（南から）
ｃ．試３ｂ区全景（南から）
ｄ．試２ｂ区全景（南から）
ｅ．明治42年発見土器
　　出地地点（北から）



a



b



c

d

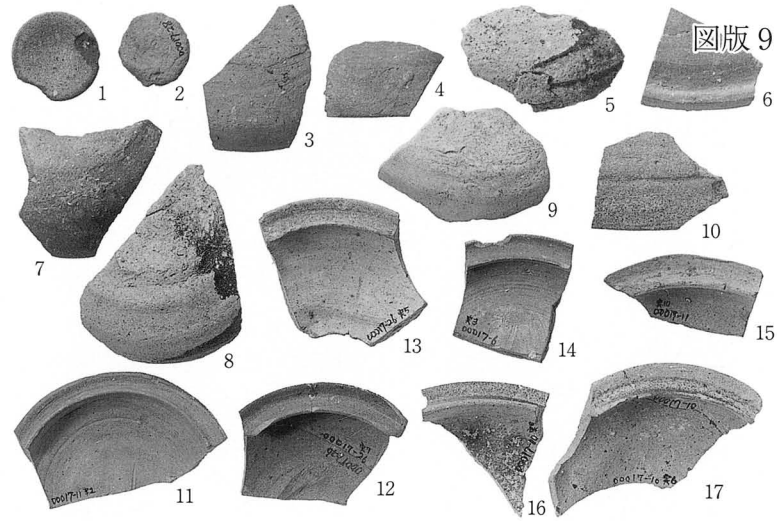
e

f

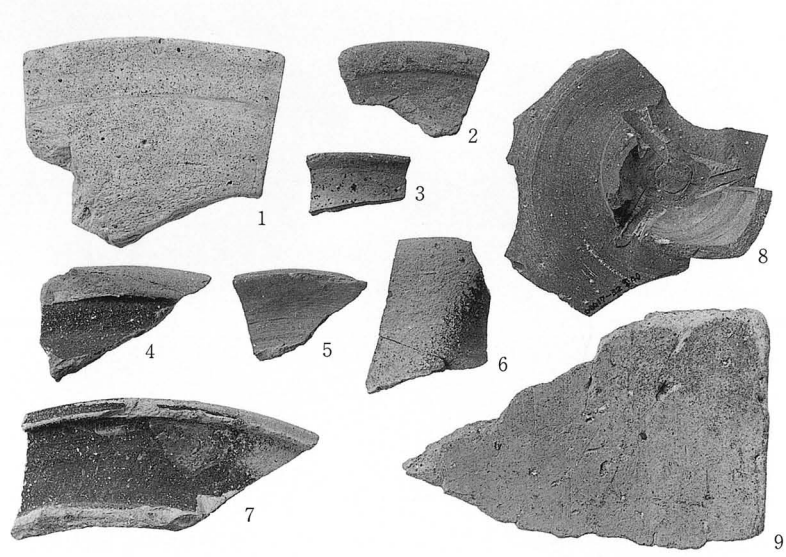
g

h

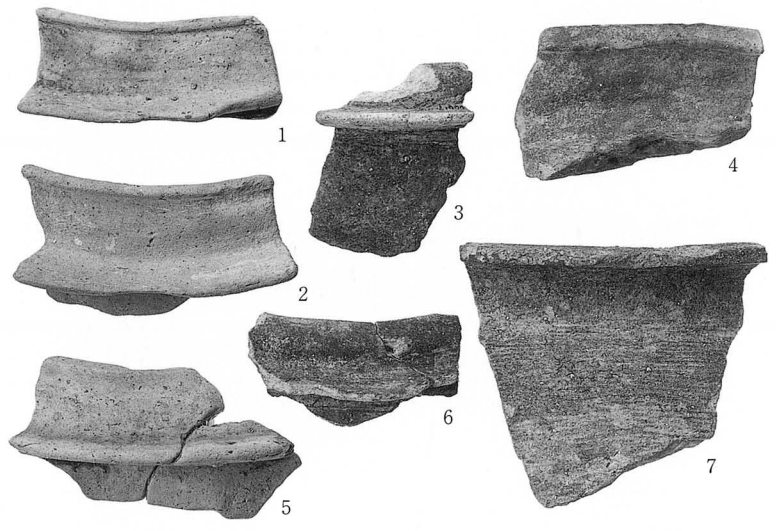
i



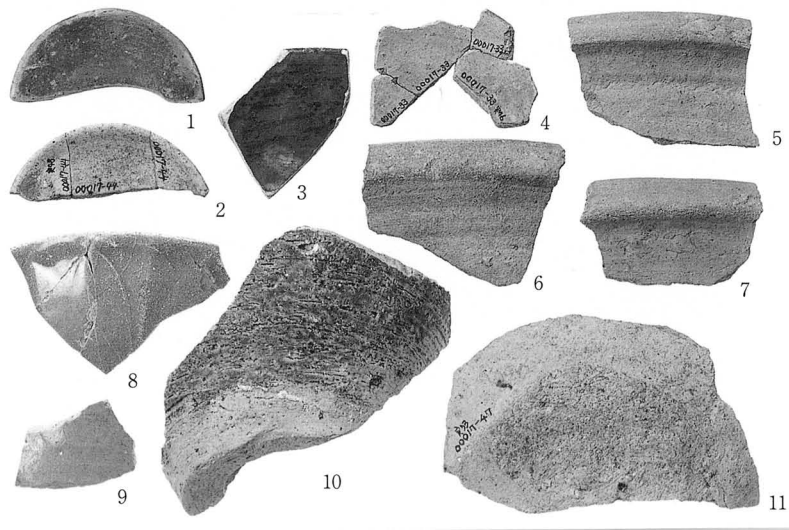
a．飛鳥時代須恵器



b．飛鳥時代須恵器



c．中世土器



d．中世土器

a

b

d

c

e

明治42年発見土器